

明治十年四月廿六日

中嶋庄治印

丙第壹號

差配証文ノ事

吉岡村御高辻ノ内

一高四拾六石也

今度定吉質入高

此譯

田高四拾石九斗六升壹合壹勺

畑高五石三升八合九勺

此反別

田八百七拾貳束蒔

入立米八石七斗貳升 字市ノ坪

中畧ス

田合四千八百八拾七束蒔

入立米四拾壹石八斗七升

畑壹ヶ所

入立米九斗

字八マン畑

同壹ヶ所

入立米四斗壹升

字八マン畑 但川端澤不殘

同壹ヶ所

同壹石九斗八升

前同所

同壹ヶ所

入立米貳斗六升

前同所

同壹ヶ所

同四斗五升

字西畑

同壹ヶ所

同三斗六升

同中野屋敷

同壹ヶ所

同壹斗八升

同ツツ畑

同壹ヶ所

同五升

同代官屋敷

畑八ヶ所 入立米合四石五斗九升

田畑入立米四拾六石四斗六升

右ハ吉岡村高辻ノ内書面ノ通高反別相改拙者預差配役小作請仕

候處實正也然ル上ハ風水旱損如何様ノ惡作仕候共相定ノ入立米少シモ無滯貴殿御差圖ノ場所へ急度相斗可申候方一小作米相滯候歟又ハ拙者差配役小作入御氣不中候ハ何時成共御取離余人へ御渡可被成候其節高反別相改急度和渡シ可申候扱又拙者無滯差配役相勤候内ハ幾年モ此証文御用置キ可被成下候爲後日証據請人以連判差配証文相渡申處如件

上元屋敷村

差配人

文政七申年二月

助次右衛門印

上稻塚村

証據人

久吉印

吉岡村

同斷

定吉印

同斷

又兵衛印

庄屋

受人

長左衛門印

戸野目村

貞吉殿

丙第二號

請作申水入証文之事

一田貳百拾五束菴

四ッ屋田

中略ス

田千六百五拾七束菴

入立米拾六石五斗七升

内

米三石壹斗六升五合七勺

米納

同五斗七升三合

役米

同貳斗七升

嘉右衛門方へ
勘辨米

小以米四石壹升七勺

殘米拾貳石五斗五升九合三勺

此廻米壹石四合七勺

右ハ書面ノ反別銘々相改當卯年一作限り請作仕候處實正ニ御座

候然ル上ハ相定之入立米廻米共當秋十月限り貴殿御差圖ノ場所
へ相斗可申候若シ相滞候ハ、小作地不殘御取離シ可被成候勿論
私小作中ハ年々水入証文相改可申等ニ候へ共以御勘辨此証文ヲ
以テ御用置可被下候爲後日之水入証文以受印相渡申處如件

吉 岡二村

小 作 人

安政二卯年二月

吉印

受 人

久 兵 衛 印

上池部村

同 斷

嘉右衛門印

戸野目村

貞吉殿

丙第三號

田地差配証文之事

吉岡村高辻ノ内

一高三升二

此度三右衛門後家質入高

此反別

田七拾七束三分蒔

三右衛門屋敷

内

田三拾束蒔

戸野目村貞吉前々ヨリ所持地ニ

引又田四拾七束三分蒔

此入立米四斗七升三合

右高反別銘々相改私シ差配役小作仕候處實正ニ御坐候然ル上ハ
相定之入立米貴殿御差圖ノ場所ニ相斗可申候若シ小作相滞候歟
又ハ私シ差配役入御氣ニ不申候ハ、何時成共御取離可被成候其
節早速立會反別畝歩相改書面之通相渡可申候私シ差配ノ内ハ年
々此証文ヲ以御用置可被下候爲後日田地差配証文以請印相渡申
處如件

吉岡村

差配人

定

吉印

天保八百九十二年十二月

証據人

三右衛門後家印

同斷

天治八年正月十二日

戸野目村

貞吉殿

助左衛門印

同 斷

同 久兵衛印

同 斷

長左衛門印

丙第四號

田地差配証文ノ事

吉岡村高辻ノ内

一高七石六斗四合

此譯

戸狩村七兵衛質入高

高六石貳斗六合

同貳斗四升三合

同壹石壹斗五升五合

此反別

田拾八束蒔 入立米壹斗八升

中畧

田八百六拾三束蒔

入立米八石六斗三升

畑貳百八拾五步 入立米五斗

惣入立米九石壹斗三升

右ハ貴殿當村掛持高ノ内去丑年迄小作銘々直口ニ被成置候へ共

私儀貴殿方ヨリ差配イタゞ居候緣因テ以私差配役小作仕度相頼

本田方

同畑方

新畑方

向田

候處御承知被下則當寅年ヨリ書面ノ高反別銘々相改私差配役小
作仕候處實正ニ御座候然ル上ハ相定之入立米壹石ニ付廻米八升
ツ相添貴殿御差圖ノ場所へ相計可申候若小作米相滯候歟又ハ
私差配役小作入御氣不申候ハ、何時成共御取離可被成候其節早
速立會反別畝歩相改急度相渡可申候扱私差配中ハ年々以此証文
御用置可被下候爲後日之田地差配証文以請印相渡申處如件

吉岡村

田地差配人

定

吉印

嘉永七寅年五月

上元屋敷村

請ケ人

九平治印

戸野目村

貞吉殿

丙第五號

田地差配証文之事

吉岡村御高辻ノ内

一高四斗貳升

此度定吉質入高

此譯

高三斗貳升

本田方

高壹斗

畑方

此反別

田六拾束蒔

字向新田

入立米六斗

同三拾貳束蒔

同所

入立米三斗貳升

同六拾五束蒔

同所

入立米六斗五升

同五拾貳束蒔

同澤田

入立米五斗二升

田二百九束蒔

入立米二石九升

右高反別銘々相改私差配役小作仕候處實正ニ御座候然ル上ハ相定ノ入立米貴殿差圖ノ場所ニ相計可申候若シ小作米相滯候歟又ハ私差配役小作入御氣不申候ハ何時成共御取離可被成候其節早速立會反別畝歩相改書而ノ通急度相渡可申候扱私差配役中ハ

年々此証文ヲ以御用置可被下候爲後日田地差配証文以受印相渡シ申處如件

吉岡村

田地差配人

又右衛門印

嘉永四亥年十二月

受人

定吉印

戸野目村

貞吉殿

丙第六號

田地差配証文之事

吉岡村高辻ノ内

一高七石五斗

此度定吉質入高

此反別

田八百七拾貳束蒔

字一ノ坪

入立米八石七斗二升

右高反別銘々相改私差配役小作仕候處實正ニ御座候然ル上ハ相
定之入立米貴殿御差圖ノ場所へ相斗可申候若小作米相滯候歟又
ハ私差配役小作入御氣ニ不申候ハ、何時成共取離シ可被成候其
節早速立會反別畝歩相改メ書而之通急度相渡シ可申候扱私差配
中ハ年々以此証文御用置可被下候爲後日田地差記証文以請印相
渡申處如件

上元屋敷村

田地差配人

天保十一子年十二月

助左衛門印

吉岡村

受人

定吉印

戸野目村

貞吉殿

小作証文差入難キ陳述スルモ前陳ノ如ク其地ノ習慣ニテ太甚キハ
小作証文モ不取置小作入置ノ類夥多有之今日ニ至リ舊習ヲ咎ムル
送甲第一號証書差入タル上初審裁判所御審問中原告自ラ該一號証
ハ勿論又小作受モ致タルニ相違無キ旨申立今ニ至リ高反別符合セ
サル而已テラ該約定書手署ニシテ實印ナキヲ以テ本訴ニ係リ効

カナシト云モ印形ハ紛失云々該証ニ判然記載アリ加之初審裁判所
ニテ申立ルノミナラス最初差出シタル控訴狀ニモ顯然表シ今更右
様申立ハ巧言文飾ノ甚シキモノト云ヘシ如斯無謂儀ヲ申立自他ノ
損害ヲ醸ス迷惑一方ナラス因テ速ニ小作証文差入候様至當ノ裁判
アラソコヲ乞フ

判文

小作証文催促ノ一件新瀉裁判所高田支廳ノ裁判不服ノ趣ヲ以テ及
控訴次第遂審理判決スル如左
原告ニ於テ本訴ノ地所ハ證據書類ニ照ス時ハ被告ノ所有ノ如クナ
レト本國ノ慣習ニ因レハ其實原告ノ所有ニシテ所謂抵當ニ比シキ
モノト云レハ被告ノ請求ニ難應旨人第二號縣廳布達及人第三號ノ証
書寫ヲ証トシ陳述スト雖モ其縣廳布達ノ趣意果シテ本件ノ地所ニ

適當スルモノト爲スモ該布達到達ノ後テ原告人ハ地券請ケ願書及
ヒ地券臺帳ノ中純然タル自己ノ所有地ト認メシ訴外ノ高貳石餘ノ
部分ニノミ調印セシ事蹟ヲ見レハ即チ當時原告ハ該布達アルモ本
訴ノ地所ニ於テ自己所有ノ權利ナシト決心スヘキ情實アリシカ若
クハ權利アルモ之ヲ拋棄スルニ非ルヨリハ焉ソ獨リ訴外ノ所有地
券ノミヲ乞フ可ケンヤ則チ此時本訴ノ地所ハ純粹ナル被告ノ所有地
ト看認シモノト看認サル可カラス仍テ原告控訴ノ主意不相立條到
底初審裁判所裁判ノ通リト可相心得事

大審院ニ於テ

原告 山本文吉代人野澤鷄一上告ノ要領

第一條

抑裁判所ハ訴訟人双方カ未タ曾テ爭ハサル餘事ヲ恣ニ援引シ若シ

ハ争外ノ事物マテ穿鑿シ以テ其訴訟ヲ裁斷スヘキモノニ非ス若シ
 果シテ之カ裁斷スヘキモノトセハ訴訟者ノ思意如何ニ由ラスシテ
 裁判官ノ思意如何ニ出ルモノト云ヘキガ今ヤ東京上等裁判所カ原
 被告未ダ會テ争ハサル訴外ノコトヲ以テ判決セラレタルハ聽斷ノ定
 規ニ違フ不法ノ裁判ナリト思考セリ如何トナレハ本訴ノ論點ハ支
 配存留ノ質地ニシテ本國ノ習慣タル如斯キ質地ハ抵當同様ナルニ
 付質置主即チ原告ノ所有未ダ不放モノト云ヒ被告即チ質取主ニ於
 テハ只証書面字句一片ニ拘泥シ既ニ流地トナリ所有權被告ニ在ル
 ト云ニアリテ地引帳ニ調印スルトセサルトニ由テ所有權ノ所在如
 何チ争フニ非ス然ルチ東京上等裁判所ハ原告人ハ自己ノ所有地ト
 認メシ訴外ノ高ノミ調印セシチ見レハ原告ハ本訴ノ地所ハ所有ノ
 權利ナシト決心ス可キ情實アリシカ若シハ之チ拋棄スルニ非ルニ

リハ焉ノ獨リ訴外ノ所有地ノ地券ノミチ乞フ可ケンヤ云々ト判決
 セラレタレハナリ

第二條

明治十一年五月十四日東京上等裁判所ニ於テ本訴外原告所有ノ田
 地幾許カアルト又該地々券下附チ出願シタルヤトノ審問アレハ田
 地ハ二石四斗八升ナリト覺ユレハ確答致シカダク又地券願ノ儀モ
 同斷ニ付尙本國問合ノ上兩様トモ上申スヘキ旨上陳セシニ判官固
 ヲリ要用ノ件ニ非ス只判官心得迄ノミナレハ詳悉ヲ要セサレハ問
 合等チナスニ及ハストノコトナリシニ尙又明治十一年五月二十一日
 召喚アリテ前文二石余ノ田地ニ調印セル年月取調アリタレハ記臆
 セスト謝言シタリ然ルニ縣廳ノ布達ハ明治七年一月ナレハ只其前
 後ノ大概ヲ要セハ足レリトシテ本國照會ヲ許サレス故ニ案スルニ

縣廳布達後殆ト一周年ヲ隔絶シ調印セシト覺ヘ即チ明治八年頃ナ
 リト上陳セリ而シテ此キ尙他ニ上申シタキコアルヲ以テ詳細書面
 ヲ進呈致度旨情願シ其許可ヲ得テ退散シ該書面取調中同明治十
 一年五月二十七日証據物所持出頭スヘキ旨ノ差紙ヲ受出頭シ則チ
 前書許可ヲ得ル所ノ書面排駁書ト題目ヲ進呈セシニ該書面ニ就テ
 ハ一ノ審問モナク突然判決申渡アリ實ニ愕然ノ至リニ不堪如何ト
 ナレハ上申シタキコアリテ其書面進呈ノ許可ヲ與ヘナカラ該書面
 差出シタルニ一ノ審問モナキノミナラス第一條ニ陳辨セシ如ク判
 文ニ地券臺帳ニ調印ニ由テ所有ノ有無ヲ判決セラレタルニ該調印
 ノコタル記憶セサルヲ以テ本國へ問合ノ上上申スヘキ旨中立ルモ
 要用ノ事ニ非サレハ右等ノ手數ヲナスニ及ハストシテ却テ之ヲ判
 決ノ要点トセラレシハ如何シヤ原告人ニ於テハ判官ニ欺騙セラレ

タルト悲歎ノ外無之其後調印ノ年月并ニ地所何々ニ調印シタルヤ
 ナ取調ルニ果シテ前上申セシト相違アリ己ニ本訴外ノ田地ノミ調
 印セシ如ク判決ナレトモ元來本訴ノ田地ニ明治八年中原告人カ調印
 之ヲ縣廳ニ呈シタリ其後本件ノ爭論起レルニ付本訴ノ田地ノ爭
 論落着迄原被執レモ地券受ヘキニ非スト心得乃チ明治十一年二月
 中縣廳ニ納完シタル名寄帳ニハ調印セザレトモ己ニ一端本訴ノ田地
 ニ調印シタルハ概シテ本訴外ノ田地ノミ調印シタルヲ見レハ云々
 ノ判決ハ事實ニ適セサル不法ノ判決ナリ如是事實ニ適セサル裁判
 ナリシタルハ只明治十二年五月二十一日ノ口供ニ由ル下セラルヘ
 ンハ必然ナレトモ前陳ノ如ク臆測ヲ以テ中立タリ口供ニテ詳細ハ
 本國へ問答ノ上上申スヘシト屢陳述セシニ之ヲ許サス却テ如是判
 文ヲ與ヘラレタルハ是則チ不尽ノ審問ト云ハサルヲ得ス是破毀ヲ

乞フ所以ナリ。又名寄帳ニ調印スルモノハ戸長ノ要促ニ從ヒ其指示ス所ニシテ調印スルモノニシテ其調印ノ脱漏ハ敢テ人民ノ疎漏ト云ヘカラス故ニ名寄帳ノ調印如何ヲ以テ断定セラシハ頗ル不法ト云ヘシ如何トナレハ若之ニ反シテ訴外ノ田地ニ調印セスシテ本訴ノ田地ニシテ調印シアレハ又本訴ノ田地ハ原告ノ所有ニ歸シ訴外ノ田畑確乎タル証據アルモ所有權ヲ失フタルモノトセシカ實ニ東京上等裁判所ノ裁判ハ謂レナキ裁判ト云ヘシ。前條々ノ理由ナルニ付原裁判ヲ破毀セラシテ乞ヒ然ル上事實ニ進入シ本國ノ習慣其他實際ノチ陳述セントス。上告ノ主要ハ左ノ二項ニ在リトス。

一本訴ノ論趣ハ支配存留ノ質地ニシテ流地トナラサル習慣ナルニ証書ニ拘泥シ地券臺帳ニ調印セシテ以テ裁判アリシハ訴外ノ裁判ヲ以テ審問アリシニ記憶セサルヲ以テ本國ニ照會ヲ乞ヒ本訴ノ要點ニ非ストシ聞届無ク裁判アリシハ不條理ナルヲ以テ此口供ハ改正ヲ受度且又他ニ上申致度有ルニ其旨申立置排駁書ト題シタル書面ヲ差出シタルニ明治十一年五月二十七日証據物所持出頭スヘキ差紙ヲ受ケ出頭シタル處該排駁書ニ就テ一ノ審問モナク突然判決申渡アリシハ不法ナルヲ以テ更ニ裁判受ケ度トシ。

第一條

抑乙第一號文政七申年二月附乙第五號嘉永四亥年十二月附乙第六

號天保十三子年十二月附ノ各証ハ十年季ノ質入ニテ各期限ヲ經過
 シ流地トナリタルモノナシテ地方ノ習慣ニ依リ未所有權ヲ移サ、
 總宅大和ヲ專ラ人第三號明治七年戌一月新瀛縣廳ノ布達ヲ証左ト
 大レモ原告カ右三通ノ質入証書ハ地方ノ習慣ニ由リタルモノト分
 別スヘキ証憑ナク又原告カ所持スル人第一號甲乙丙丁等原告名宛
 ノ年貢証アリト雖モ被告ニ於テハ被告名宛ノ年貢請取証在ル上ハ
 所有權ハ被告ニ移サ、ルモノト認定スヘキモノニ非ス猶原告カ所
 持タル年貢請取証ハ果シテ本訴ノ高地ニ相當スル請取証ナリトモ
 看認難シ又高貳石余ノ部分ニ調印ノ事件ニ付キ争ヒ無キニモモ
 果シテ原告カ云フ如ク該三通ノ証書ノ田地ニ於テ未タ所有ヲ移サ
 ズルモノニスレハ本訴ノ高地ヲ關キ貳石余ノ高地ノニモ調印スヘ
 キ筋ナシ東京上等裁判所ハ是ノ理由ヲ以テ裁判シタルモノナレハ

訴外ノ裁判ヲ爲シタリト謂フヘキモノニ非ストス

第二條

明治十一年五月十四日ノ口供ヲ閱スルニ原告被連名ニテ其口供ニ原
 告申上候木訴田畑ノ外自分所有ニテ地券受願及ビ地券臺帳ニ調印
 シ差出シノ分ハ高貳石四斗八升ノ目ニ有之候事トアリ是ヲ以テ之
 ヲ視レハ記憶セサルヲ以テ本國ニ照會ヲ乞ヒタルモノト看認ヘキ
 口供ニ非レハ此口供ヲ今更改正スル筋ナシ且又嚮ニ東京上等裁判
 所ヘ出シタリト云フ排駁書ハ明治十一年五月二十七日附ニテ即チ
 裁判宣告ハ當日ナリ猶是レヲ東京上等裁判所ノ書類ニ徵スルニ該
 排駁書ニ相見ヘス然スル時ハ該排駁書ハ到底差出シタルモノト看
 認ルヲ得ス

判決

前條ノ理由ナルニ依リ東京上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナキ
モトス

第六號

○地所受戻對談違約一件上告ノ判文明治十一年一月廿一日上告
明治十二年一月廿九日申渡

原告

神奈川縣下武藏國多摩郡

八王子驛八日市字本宿四

百二十五番地平民黒沼喜

右衛門

右代人

同縣下横濱太田町四丁目

六十四番地平民

山田泰造

被告

同縣下同國同郡八王子驛

八幡宿平民

城所庄五郎

東京上等裁判所ノ審判

原告 城所庄五郎代人 大谷徠助控訴ノ要領 明治十年八月二十五日

論地上畑七反九畝八步中畑七反九畝八步ハ左ノ第三號証ヲ以被告

初審 原告 ヲリ買取第四號証ノ通り増金ヲ與ヘ第一二號地券ノ通り

第三號

賣渡申畑証文之事

武藏國多摩郡横山宿

八百三十三番

字鷹部屋

一上畑七反九畝八步

地券証一箇所

此高六石三斗四升壹合

此地代金百五拾圓也

同國同郡横山宿

八百三十四番

字鷹部屋

一中畑七反九畝八步

地券証一ヶ所

此高四石七斗五升六合

此地代金百圓也

右者我等所持之畑地今般示談之上前書之通り代金請取賣渡候處
實正也然上ハ自令地税諸役貴殿方ニテ御勤被成畑支配可被成候
右地所ニ付親類ハ不申及脇ヨリ故障之儀一切無御座候爲後日賣
渡一札如件

明治七年第二月

地所賣渡人

黒沼喜右衛門

親類証人

藤野新七

城所庄五郎殿

前書之通り相違無之ニ付致與印候以上

用掛り

鈴木新七郎

第四號

添書之証

金四百廿五圓也

今般我等所持之畑地示談之上代金取極々本紙証文ヲ以賣渡候處

實正也然ル處別段御無心中入前書之金子御出金被下合金六百七拾五圓也加印之者立會正ニ請取申候右畑ニ付向後違亂無之確定之添書入置申處如件

明治七年第二月

金子請取人

黑沼喜右衛門

親類証人

藤野新七

城所庄五郎殿

第一號

第五百一號

地券之証

武藏國多摩郡横山宿

八百三十三番

字鷹部屋

多摩郡横山宿

一上畑七反九畝八步

持主 城所庄五郎

此地代金百五拾圓也

右檢査之上授與之

明治七年三月

神奈川縣令從五位中嶋信行印

十一等出仕飯嶋憲章印受附

第二號

第三百號

地券証

武藏國多摩郡横山宿

八百三十四番

字鷹部屋

多摩郡横山宿

一中畑七反九畝八步

持主 城所庄五郎

此地代金百圓也

右檢査之上授與之

明治七年三月

神奈川縣令 中鳥信行印

十一等出仕飯島憲章印受附

ニテ原告ノ所有地タリ而シテ該地ハ明治七年二月ヨリ明治十年二月迄三箇年内ニ買戻シテ被告ヘ約セシハ被告第一號証ノ通りナリ然ルニ明治十年二月二日引合人梅原兵藏ヨリ被告依頼ノ趣ニテ論地向フ三箇年置据ノ事ヲ依頼アリタルニ原告肯シセサル旨答ヘタリ其外買戻シノ掛合ヲ受ケタル事之レナク且被告第一號証ハ明治七年二月十七日ノ契約ニ付則チ期限明治十年二月十七日ナリ然ル

チ被告ハ初審ニ於テ右期限ヲ三月十七日ト申立タリ而シテ被告カ期限内買戻ノ掛合ハ二月ノ廿日ヨリ廿五日迄ノ間ト申立ツレハ前顯一號証ニハ來ル丑三月迄ト記載アレハ二月十七日期限ニ付被告カ二十日以後ノ掛合ハ已ニ期限後ナルモノナリ又明治十年二月六日引合人ヨリ被告ヘ送リシ文書中ニ置据ノ儀ハ承知ニモ不相成候ニ付期限ニモ相成候事故御返シニ致ス可シ云々トアリ是レ引合人ノ專斷ニ成リシ書面ナルモ被告ハ原告ノ云フ所ト信スヘシ原告ハ約定期限内ニ該地ヲ被告ヘ返戻スルハ決シテ拒マズ其拒ミシハ置据ノ事ノミナリ原告既ニ置据ヲ肯セスシテ全ク返戻ヲ望ムト聞ハ宜ク速ニ請戻ノ手數ヲ盡スヘキニ此レヲ盡サレシハ被告自ラ好テ期限ヲ經過セシニテ原告ノ怠リニ非サルヤ明カナリ然ルチ被告ノ怠リニ非スシテ原告ノ怠リナリト裁判セラレシハ服セサル所ナ

將ヲ期限ノ盡ル前後ニアツテハ原告既ニ歸郷イタシ居レリ然ル
 ニ之レヲ審ニモス獨リ裁判官ノ臆測ヲ以テ原告ハ請戻シノ談判ヲ
 承認シナカラ其談判ヲ完了セサル内原告人自ラ他行シ其他行中訂
 約ノ期限ノ經過セシハ被告人ノ怠リニアラスシテ原告人ノ怠リナ
 リトスト裁判セラレシハ抑何ニ証ニ據ラレシハ原告人於テ實ニ解
 スル能ハサルノミナラス當時不在ニアラザル者ヲ故ナク之レヲ不
 在ナリト指定シ原告人ノ怠リナリトシテハ頗ル偏頗ナルヲ覺
 け又明治十年三月六日引合人ヨリ出シテ書翰ハ桑苗代價ノ掛合ヲ
 主トスル者ニシテ地所受戻ハ掛合ト謂フヲ得ス蓋シ或ハ之ヲ地所
 受戻ノ掛合ト云フモ引合人ノ專斷ニ返答ヲ爲セシトシテ原告
 ハ之ニ關セサルナリ良シヤ原告ノ之ヲ知シテハ其ハ該返リ証
 書ハ原告ニ於テ既ニ期滿得免ノ權ヲ得シ純然タル原告ノ所有ナル

ハ賣ト賣ラサルトハ其所有者ノ權内ニ有ツテ曾テ他人ノ啄ヲ容ル
 能ハサル者ナリ然ルヲ留守管理者ノ胸算ニ合ス願ニ受戻シノ事ハ
 整頓セル者トノ判決ハ極メテ不服ナシ三月六日ノ頃桑苗代價
 管理者ノ胸算ニ適シシニモ該地所ハ己ニ原告ノ所有アリ然ラハ
 假令其桑苗代價ノ談判ヲナスモ豈期限ノ經過ヲ許シタルモノト見
 做スヲ得ヤ右ノ裁判甚不服ニ付更ニ至當ノ裁判アラン事ヲ請フ

被告 黒沼喜右衛門 代理人 山田泰造 答辯ノ要領
 論地ニ筆ハ原告第三號第四號ノ通原告ハ廣渡ヲ被告第一號
 ノ通

第一號 差入申返り書之傳
 上野源通 印守 櫻部屋 三

一高拾壹石九升七合三夕

畑貳筆

此買請代金六百七拾五兩也

右畑地今般我等方へ前書ノ代金ニ買請候處實正也然ル處當戊二月ヨリ來ル丑二月迄中年三ヶ年ノ内右ノ金子返金相成候ハ、畑相返シ可申候尤年限中退々畑地へ桑苗植附致候間若請戻候節ハ右爲桑代相當ノ代金可償取極ノ義對談相違無御座候依之返リ書一札差入申處如件

畑地買請人

城所庄五郎印

証人

梅原兵藏印

黒沼喜右衛門殿

原告ヨリ返証書取置而シテ期限前明治十年一月二十七日一月三十日兩度罷越シ候處原告不在ナルニ付証人梅原兵藏方へ罷越シ論地向フ三ヶ年置据ヲ依頼シ若シ置据不相成ナラハ約定ノ通可請戻兩條掛合ノ義追々談判ノ未被告第二號ノ一ノ通梅原兵藏ヨリ書翰ヲ差越シタリ

第二號ノ一

御天氣ニ而御同意大慶ニ奉存候之ければ先日は御地走に相成御禮申上候其時の一條の義先方へ談判いたし候處置すへの義は承知にも相成兼候に付期限にも相成候事故御返しに可仕由申右に付而は多分の雜費相掛り候に付元金之外御出金被下候様申居候間いつれにも御面會之上可申上候得共當節戸籍調中又々物産取調商業入取調旁々多用に而參上仕兼候處先方取急き度々申出候

問此段一寸申上候先ハ右申上度早々以上

二月六日

黒沼喜右衛門様

松井兵藏

貴下

其文中承知ニモ相成兼又御返シニ可仕由申右ニ付雜費相掛リ候ニ付云々ト有之是則被告ハ等閑ナク置据ト受戻シト両條ノ掛合ヲ起シタルモノナリ而シテ當時原告カ元金ノ外多分ノ雜費ヲ望シヨリ遷延シ其談判ニ及ヒ追々延引セシモノニシテ被原カ期限ヲ經過セシニ非ルナリ

一原告云期限内ニ該地ヲ被告へ返戻スルハ決シテ拒マサル所其拒ミシハ置据ノ事ノミト述レモ是レ實際ト大ニ齟齬セリ前顯証人ノ手簡ニモ受戻ニ付テハ多分ノ雜費相掛リタルニ付元金ノ外出金可

致トノ趣意ヲ主張スレモ被告ニ於テハ雜費ノ如キハ契約外ナルヲ以之ヲ否ミシナリ然レモ些少ノ金額ニテ受戻シ整フ上ハ其意ニ應セント原告ノ意ヲ問フニ意外莫大ノ雜費ヲ償ハサレハ返地致シ難シト不當ヲ陳ルモリ遂ニ紛議ヲ生セリ之レ該訴ノ起由ナリ

一原告ハ被告ニ於テ原告ソ既ニ置据ヲ肯セスシテ全ク返戻ヲ望ムト聞ハ宜ク速ニ請戻ノ手數ヲ盡スヘキニ此ヲ盡サバリシト云モ被告カ手續ヲ怠リシニ非ス屢談判ヲ爲モ原告ハ不在ニ托シ或ハ事故ニ托シ到底雜費ノ要償ヲ主張セリ然レモ穩當ヲ主トシテ掛合ヘモ取合ハサルニ依リ中西長藏ヲ以テ該件專務ノ代理トシテ掛合ヲ爲シタルハ即チ左ノ証人ヨリノ書簡ノ如ク

第二號ノ二

書中ヲ以申上候先日中方度々御足勞被下毎度失禮申上候扱一條

之儀昨日御咄シ之趣早速罷越シ申通候可相成ハ御渡シ之趣ニテ
多分勘辨爲致急々取極リニ相成候様仕度種々周旋方イタクシ候得
共仰之趣ニ而ハ多分相違之由申且倅義モ出京留守ニ付何レ歸宅
篤ト勘考之上御挨拶可申上旨申候間此段一寸申上候左様思召可
被下候余者貴面之上萬々可申上候早々以上

三月六日

中西長藏様

梅原兵藏印

貴下

度々御足勞被下云々トアリ是レ其手續ヲ怠ラサル端緒証スルニ足
シリト云ヘシ
一原告ニ於テ期限ノ盡ル前後ハ歸郷シアレリ是ヲ審ニセスシテ獨
リ裁判官ノ臆測ヲ以テ原告ハ請戻シノ談判ヲ承認シナカラ其談判

ヲ完了セサル内原告人自ラ他行シ云々原告人ノ怠ナリトセラレシ
ハ頗偏頗ナル旨主張スレモ被告ニ於テハ果シテ原告カ其前後在宅
ナルヤ否必セスト雖モ掛合中不在屢ニシテ現ニ在宅ト思量スルモ
不在ノ旨ヲ以テ避ケタリ然リ而シテ初告ニ於テ審理中原告及ヒ引
合人訟庭ニ於テ不在ノ旨ヲ明言セリ故ニ此判決アリシナリ被告首
メテ原告ノ嚮キニ不在ニ托センハ虚ニ非スシテ實ナリト信セリ然
ルヲ控訴ニ寢ミ又反異セルハ頗ル不都合ト思考ス
一証人ヨリ三月六日ニ出セシ書簡ハ桑苗代價ノ掛合ヲ主トスルモ
ノニシテ云々引合人ノ專斷ヲ以テ返答ヲ爲ス所ニシテ云々ト述レ
モ桑苗ハ地所受戻シニ附帶セシモノナレハ該件整ハスシテ安ソ能
ク受戻シノミヲ諾センヤ然シテ通知ノ如ク桑苗價格多分相違セシ
故原被告ノ間ニ一層ノ紛議ヲ生シ其カ爲メ經過セシナリ之ヲ要ス

ルニ原告カ遷延セシメシモノナリ該書簡中ニモ何レ歸宅篤ト勘考
 ス上御挨拶可申上旨云々トアリ然ル上ハ假令証人ノ專斷ニ出タル
 ト假定スルモ被告ノ怠リニ非ルヤ昭々スリ原告之ヲ知ラズモ
 期限經過セシハ証人ニ對シテ述ルトモ被告ニ對シテ述ルハ口實ナ
 リトスルニ由ルニ非ズ
 一三月六日ハ己ニ期限經過セルヲ以テ返地セサルトノ儀ナレハ該
 時直ニ其旨ヲ以テ被告ニ通知スルニキ筈ナルニ然サルハ即チ紛議
 中ニ成ル事實ハ一証ナリ又被告ニ於テハ初審ニ對シ引合人申立有知
 シ三月十六日全外整ハサレテ確報ヲ得タルニヨリ其翌十七日該區
 裁判所ニ出願セシナレバ被告ノ怠リニ非ルナリ且訴訟前ニ談判ハ
 雜費ト桑苗ノ價格ニ之ノアリ然ルニ原告保初審ノ答辨ヲ爲スニ當
 リ首ノテ期限後タルトナリ主張シ其事實ヲ隱蔽セシメテ蓋談判中此

チ圖テ造意セシモノナルカ被告ニ於テ原告ガ胸謀ヲ看破スル能ハ
 ス然レモ實際手數ヲ盡シテ怠ラサルニハ僅カニ其徵証ヲ証人ノ尺
 牘ニ得タルナリ依テ實際審問ノ上至當ニ裁判アラズ事ヲ請フ民六
 引合人 梅原兵藏供述ノ要領
 明治十年二月初旬被告罷越シ該地向フ三ヶ年置据ノ儀依頼ニ付原
 告方へ相越シタル處原告病氣ニ付長男城所庄九郎へ被告依頼及
 談判致シタル處同人ニ於テ父庄五郎へ相談ノ上三ヶ年置据ノ儀ハ
 承諾シ難キ旨答タルヲ以テ被告へ二月六日ノ書簡ヲ差送タリ
 一前條ノ書簡ニ期限ニモ相成候事故御返シニ可仕云々トアルハ自
 分カ原告へ置据ノ談判ニ及ヒシ時置据ノ事ハ承諾致サズ期限ニ付
 元金ノ外被告第一號証ニ契約ノ桑代并ニ該地所ノ内原告手入ノ上
 作付ケシタル分之レアルニ付右ノ増金被告ヨリ拂ヘキ様原告ノ談

シニ依リ被告へ通知シタルモノナリ其後被告ヨリ桑代ハ差出スヘケレト其他ハ差出シ難キトノ事ニ付其段原告長男庄九郎へ申通セシ處桑代位ニテハ地所差戻シ難キ旨庄九郎申述ヘタリ其後三月ニ至リ被告ノ親類中西長藏カ引合人方へ來リ第一號証ノ外被告カ原告ヨリ五百圓ノ負債之レアル趣有テ涙金トシテ該地所ハ原告ニ引渡ス可キトノ談ニ付庄九郎喚ヒ迎ルニ留守中ノ由ニテ庄五郎妻コウ來リタルニ付被告申聞ケノ段申通シタル處被告第一號証ハ最早期限經過シタルモノナリト庄五郎申シ居ルナレト庄九郎留守中ノ事故歸宅次第相談致ス可キ旨答ヘタリ但庄五郎ハ當時癡氣ニテ該件ハ庄九郎ト談判セシヨリ庄九郎ヲ喚迎ヘシナリ其翌日則三月六日ノ書簡ヲ差送タリ

一初審裁判所ニ於テ對審ノ節十年五月二十九日引合人申立タル口

供ハ只今被告カ讀上タル口供寫ノ通ニ有之候

一右口供ニ受戻トアル當時引合人ハ右様ノ申立ニハ無之ト存候得共口供ニ調印アレハ全申立違ニテ該地被告ヨリ受戻ノ掛合ヲ受シハ十年二月中ニハ一切之レナク十年三月六日ノ書簡ヲ送リシ後被告ヨリ受戻ノ掛合ヲ請タル事之レアリシナリ

一被告ハ桑苗代ヲ百圓トシ地所本金ニ合セ金七百七拾五圓ニテ請戻シ度旨ニ付十年三月九日歟或ハ十日ト覺へ原告方へ相越シ庄九郎へ談セシ處庄九郎へ庄五郎ト談判ノ上右地所ハ約定期限後ニ付請戻シノ談判ハ致サハル旨答ルニ依リ引合人ヨリ原告取合ハサルニ付行届サル旨被告へ申通シタリ

判文

被告ニ於テ論地字鷹部屋上畑七反九畝八步中畑七反九畝八步ハ原

告ノ名面ナレハ實際質人ナルハ被告第一號証ニ請戻シトアリ其請
 戻シノ期限ハ明治十年二月中ニ有之右期限内明治十年一月二十七
 日ヨリ追々論地請戻シノ事ヲ被告ヨリ掛合中ニシテ被告ハ論地請
 戻シノ期限ヲ經過セサルハ被告第二號ノ一第二號ノ二書翰ノ通り
 ナレハ論地ハ被告ニ於テ請戻スノ權利有之旨種々申立レテ論地ハ
 原告第三號第四號ノ通明治七年二月ニ於テ被告カ原告へ賣渡シ則
 原告第一號第二號ノ通り地券原告ノ名面ニテ論地ノ所有權ハ既ニ
 原告ニ移リタルモノナレハ被告第一號証ニ請戻ノ文字アルヲ以テ
 論地ハ質地ナリトノ被告申分ハ不相立又被告カ論地ノ請戻シテ被
 告第一號証ノ期限内ヨリ原告へ掛合中ナリトノ証ナル被告第二號
 ノ一第二號ノ二書翰ハ引合証人梅原兵藏ト被告トノ間ニ止ルモノ
 ニテ原告ハ論地向フ三ヶ年置据ノ事ノ掛合受難聞届旨相答タル迄

大審院ニ於テ

ニテ論地請戻ノシ掛合受ケタル事無之旨ヲ主張シ梅原兵藏ニ於テ
 モ論地ノ請戻シテ被告ヨリ掛合請ケタル事無之被告第二號ノ一第
 二號ノ二書翰ハ引合証人ノ考ヲ以テ被告へ送りタルモノニテ原告
 以之レヲ知ラサルモノナル旨証明スル上ハ被告ニ於テ論地請戻シ
 テ明治十年一月二十七日ヨリ追々掛合中ナリトノ事ハ特リ被告申
 立迄ニ止リ被告第一號証論地買戻シノ期限タル明治十年二月以內
 ニ被告ヨリ原告へ論地買戻シノ掛合ヲナシタルノ証據無之ニ付被
 告第一號第二號ノ証ヲ以テ原告へ對シ論地ヲ請戻スノ權利アリト
 被告申分ハ難及採用原告申立ノ通り可相心得候事 明治十年十
 一月廿二日

原告 黒沼喜右衛門代人山田泰造上告ノ要領
 判文ニ被告カ論地ノ請戻シテ被告第一號証ノ期限内ヨリ原告へ掛

合中ナリトノ証ナル被告第二號ノ一第二號ノ二書翰ハ引合証人梅原兵藏ト被告トノ間ニ止ルモノニテ原告ハ論地向フ三ヶ年置摺ノ事ヲ掛合受難聞届旨相答ヘタル迄ニテ論地受戻シノ掛合受タル事無之旨ヲ主張シ云々トアレド

本訴ニ於テ最モ特ニ緊要タル者ハ証人吟味ノ主旨ニアルヘシ証人ノ吟味ヲ必要トセサレハ之ヲ審理スルニモ及ハサル者ナルヘシ凡ソ証據人吟味ノ主旨タルヤ原被問ノ事實ヲ証スルガ爲之ヲ吟味スル者ナリ果シテ然ラハ証據人カ吟味ヲ受タル後ハ原被ニ於テ其申立ヲ拒ムヘキノ道理ナキ者ナリ若シ之ヲ拒ムハ証人カ吟味ヲ受サル前ニ在リトス而シテ其吟味ヲ受タル后ニ証人ノ申立ヲ拒ムハ其拒ムヘキノ確然タル道理ヲ有スルキニ限ルヘシ然ラサレハ証據人ノ吟味ヲ要セサル筋合ナルヘシ

明治十年十月十八日原被審問ヲ受タルモ決セス結局梅原兵藏儀ハ該件ニ付原被ニ於テ必要ナル証據人ナルヲ以テ双方ヨリ情願ノ上証據人トシテ審問ヲ願ヒタルナリ而シテ明治十年十一月十二日証人ノ吟味終リタル後ニ被告ハ論地ニ付引合人ヨリ申立タル内論地向ラ三ヶ年据置ノ儀ハ引合人ヨリ原告ヘ該示有之原告ニ於テハ難聞届相答候得共其他引合人ト被告トノ間ニ有之談判ハ原告ハ之ヲ識ラサルモノニテ引合人ノ申立ルコトハ原告ハ之ヲ信認セサルモノナリト之ヲ拒メリ然レモ右ハ之ヲ拒ムヘキノ道理ヲ有セス又拒ムヘキノ必然タル事跡ヲ發見セサルナリ加之同日原告代人小木半兵衛トアルハ戸長保証セシ公正ノ代人ニ非スシテ本人ヨリ代人ノ權ヲ委任サレタル代人大谷徠助ノ代人ニシテ明治九年司法省甲第一號但書ノ例規ニ反セシ代人ナレハ元來該訴訟ノ對審ヲ得ヘキ權利

アル可テス況ンヤ右等ノ代人ガ安ソ能ク証人ノ申立ヲ拒ムヘキ程
 ノ詳明ナル事實ヲ証シ得ヘキノ道理アラシキ程ニ至ルベシトモ一
 然ルモ東京上等裁判所ニ於テハ之ヲ以テ詞訟代人ノ効力アリ者ト
 看認ノ又証人申立ヲ拒ムヘキ正當ノ權利アル者トシ此主旨ヲ以
 テ前記人如キ裁決アリシハ條理ニ適シ且法律ニモ違ヘル裁判ト
 思考スルニ可キトモ、
 判文ニ引合証人梅原兵藏ニ於テモ論地ノ受戻シテ被告ニ掛合請
 タル事無之云々証明スル上ト云々トアレモ、
 右引合証人ハ元來被告人最親ナル姻屬ナレハ該訴ニ就テ被告ハ
 爲ニ利ヲ圖リ不利ヲ避ルハ其情ニアリ然レモ初審ニ於テ未ダ裁判
 ナ受サル内ハ其曲直ヲ判ツヘキノ要點ハ何レノ主旨ニ有ルヤ豫知
 ス可ラス故ニ其事實ヲ申述ル最眞實ナル者アリ即引合人カ明治十

年五月廿九日附口供ニ曰「自分儀ハ原告人ヨリ受戻シノ掛合アル下
 ナ被告本人庄五郎へ承リタル上庄五郎ノ申タル旨ヲ自分ハ書翰ニ
 テ道シタリ」ト是第二號ノ一ノ辨解ナリ依テ其文中ニ所謂先方トハ
 被告ヲ指タル者ニテ又一條之義承知ニモ相成兼候ニ付期限ニモ相
 成候事故御返シニ可仕由申下ズリテ特ニ受戻シノ文字ナキモ受戻
 シト置据ノ兩條ヲ掛合タルハ文中其意味ヲ含蓄セルハシナラス自
 ナ判然ト立言セシ上ノ口供ニテ他ニ疑ヲ容レ難クハ證據ニ適シタ
 ル中立ト云ヘシ又第二號ノ二書翰ハ三月六日付ニテ其文言ニ「昨日
 御咄之趣」トアリテ昨日トハ五日ヲ指タル者ニテ尙其前文「先日申
 ヲリ度々御足勞」トアリテ遼カニ五日前ヨリ掛合アル事ヲ指タル者
 ナレハ乃チ期限内タル二月中ヨリ受戻ノ談判ヲ爲シタル知ルヘシ
 「可相成者御渡之趣」ニ而多分勘辨爲致云々ト云レバ而モ該際受戻人

談判ハ概テ整ヒタルモ桑代價格雜費等ニテ原被間差違アルヲ以テ之カ爲遷延セシ者ナルハ右書翰ノ文意ト明治十年六月廿三日附証人カ始審口供ニ三月六日ノ書翰ハ原告人於テ畑地受戻ノ頼談ニ付夫ニ附帶シタル桑代ニ付彼是掛合アリタルレモ云々トアル旨意ニテ明カナリ

右ハ証人ノ中立ト其証據ニ適當セシ者ナレハ原告カ期限内ヨリ論地受戻シノ掛合ヲ爲シタルハ証明スルニ足ル者ト云ヘシ

然ルニ終審ニテ明治十年十一月十二日証人カ口供ノ要領ニ期限内タル二月ニハ受戻シノ掛合受タルヲ無之初審ノ口供ハ被告^{上告}人カ讀上ケタル寫ノ通りニ有之ナレモ右口供ニ受戻シトアル當時引合人ハ右様ノ中立ニハ無之ト存スレモ口供ニ調印アレハ全ク右口供ハ引合人ノ申立違ナリト右ハ事實ト証據等ニ反セシノミナラス真

ノ自供ニ非ス其實況左ノ如シ

該訴審理中審官ノ言ニ該訴判定ノ要點ハ第一賣渡シノ明文アルモ實際質地ナルヤ真ノ賣渡シナルヤニアリ第二期限内ニ受戻シノ掛合アルヤ否ヤニアリ第三原告カ期限ノ際在宅ナルヤ不在ナルヤ此三項ニ止ル者ナリト申サレタリ然シテ引合人ハ素ヨリ被告ノ親縁タルヲ以テ其利ヲ被害ヘ與ヘントノ情アレハ爰ニ於テ期限内ニ受戻シノ掛合ナキヲ演タルナリ依テ原告カ右ハ引合人於テ偽リノ申立ナルヲ演タル後其偽リナルヲ証スル爲メ初審ニ於テノ引合人口供寫シヲ讀聞セシニ相違ナキ旨ヲ答ヘタリ掛リ官於テ其方申立ハ當裁判ニ於テハ期限内受戻シノ掛合ナシト云ヒ又初審口供ハ讀上ケタル如ク相違ナシト云ヒ組織セリ然レハ初審ノ申立カ實ニシテ當應ニ於テノ申立ハ偽リナルヤ驛用掛チモスル其方ナレハ何

モ辨へスニ調印セシニモ非ルヘシト申サレシカハ暫ク黙シテ答言
 モ無リシカ掛官於テ然レハ初審ノ中立ハ間違ナルヤト申サレタル
 ヲヘ引合人ハ之ヲ幸ヒ唯々ト答ヘシカハ其儘口供ヲ結ハレタリ
 然レモ同日引合人於テ被告〔上告〕カ期限内ニ桑代ハ可差出ナレモ其
 他ノ事ハ難差出旨云々トアリ原告カ桑代ノ外諸雜費ヲ拒ムハ畢竟
 受戻スニ付之ヲ拒ミタルナリ若シ受戻シノ權利ヲ拋棄セハ何ソ之
 ヲ願ルノ道理アラソ右ハ自ラノ供述ナレハ此廉ハ當時受戻シ掛合
 ヲ爲シタル證據ト云ヘシ
 又同日引合人カ二號ノ三書翰ノ辨解ニ三月ニ至リ中西長藏カ引合
 人方ヘ來リ第一號証ノ外五百圓ヲ涙金トシテ云々二月中ニ受戻シ
 ノ掛合ハ勿論更ニ來リシヨモナキ様ニ言ヒ右ハ書翰ノ文詞ニ相違
 シ而シテ桑代雜費ヲ涙金杯ト變シ無根ノ言ニテ前後反異セシ立言

ナルハ判然タリ依テ之ヲ証明ト云フヲ得可テス
 右ノ如キ次第ナルニヨリ証明トス可ラサル言ヲ以テ証明スル上ハ
 下確定ノ判決有リシハ甚ク誤謬ナル不當ノ裁判ト思考ス
 判文ニ被告第二號ノ一第二號ノ二書簡ハ引合人ノ考ヲ以テ被告ヘ送
 附タルモノニテ原告ハ之ヲ知ラサルモノナル旨証明スル上ハ云
 々トアレモ右ハ第二號ノ一ニ先方ヘ談判致シ候處トアリテ其辨解
 ニ引合人カ初審中立ニハ被告本人庄五郎ヘ承リタル上遣シタリト
 旨ヒ又終審中立ニハ被告ハ病中故俸庄九郎儀父庄五郎ト相談置据
 ノ儀承諾セサル返答ニ付第二號ノ二書翰ヲ送リタリ右文言中〔元金
 之外出金〕云々ノ儀ハ原告ニ於テ手入レノ上作付タル分有之ニ付右
 之増金ヲ被告ヨリ相拂候様原告ノ談ニ付其段被告ヘ申通シタル者
 ナリトアリ

又第二號ノ二書翰ニハ「御咄シ趣早速罷越シ申通候」云々其末文ニ「御
 挨拶可申上旨申候間」云々トアリテ皆被告方ヲ指タルモノナリ而シ
 テ右辨解終審ノ口供ニ中西長藏引合人方ニ來リ云々此申立ハ事實
 及ヒ証據等ニ違ヒハアレモ皆被告ニ承リ合セタル上ノ交通ニテ自
 巳ノ考トハ言ス且書翰文中ニモ獨斷ノ意ハ相見セサルナリ然レハ
 両証トモ被告人ハ知ラサルモノナル旨証明セシ儀ハ曾テ無之ナリ
 右ノ如キ次第ニ付曾テ申立ニハ無之儀ヲ強テ附會シテ該裁判ノ主
 旨トセラレシハ甚ク齟齬セシ裁判ナレハ之ヲ不法ト謂サルヲ得セ
 ル儀ト思考スニ
 一原告人儀該件ニ就テ等閑ニセサル儀ハ二通ノ書翰ニテ明瞭タリ
 而シテ初審ニ於テ被告人儀ハ原告ヨリ地所受戻シノ掛合ナシト云
 フ証據ハ更ニ無之又右二通ノ書翰ハ被告人ノ不在中引合人ノ手ニ

成立タル者ニ有之旨申立引合人モ之ヲ証言シ即チ初審裁判書ニモ
 之ヲ記載タリ
 東京上等裁判所ニ於テ証人ノ中立ニヨレハ該件談判ハ被告人儀當
 時癩病ニハ倅庄九郎ト談判ヲ爲シタリト而シテ後度ノ書簡及同人
 ノ申立ニヨレハ倅庄九郎ハ其前ヨリ不在中ノ趣ナリ又其文中ニ「倅
 儀モ出京留守ニ付何レ歸宅篤ト勘考之上御挨拶可申上旨」云々トア
 ル旨意ニヨレハ當時被告人儀ハ倅庄九郎ニ該件ヲ擔任セシメタル
 コハ宛然見ルヘキナリ依テ擔任者不在ナレハ之ヲ強ルヲ得可ラス
 又被告ハ病中故親シキ引合人スラ尙倅ニ談判セシ旨ナレハ如何
 原告カ之ヲ強ルヲ得ン而シテ被告ハ商買ノ事故當時商用ノ爲メ他
 行セシコモアルヘシ或ハ病中引籠リシコモ有ヘシ原告ハ十年一月
 下旬ヨリ被告方ニ罷リ越シタレモ不在ノ趣ニ付返リ証書ニ証人タ

平梅原兵藏が談判ヲナシタリ故ニ引合人註之シテ答報セシナリ已
 答報アレハ之ヲ閱キ直チニ被告ニ迫ルヲ得サルハ通情ナリ然レ
 該事件紛議の起因タル以テ結局被告の専断ニ在リ其爲の期限の経過
 セシ者ナレハ原告の怠り合非ル昭然ナリ敬ニ受戻の權利ヲ失ハ
 ンキ道理無之ニシテ被告の専断ニ在リハ之ヲ以テ被告の専断ニ在
 判文ニ明治十年一月廿七日追及掛合中野物等事ハ云々(中略)
 被告第一號三號の証ヲ以テ原告の對シ論地ヲ請戻ハシ權利ヲ
 被告申分ハ難及採用ナラズルニ不附申ノ事ナリ又其文中ニ判
 判文前項ニ受戻シテ掛合ナキト二號の証ハ被告の如ク申分旨証明
 事上ハトアル趣意ニ因レル判文ナルハ申分雖モ前陳の如ク專断
 ナリ然レニ之ヲ不問ニ附シ右ノ如ク裁決アリシハ未タ其專断ヲ審
 明セラレサル者ニシテ不盡ノ裁判ト思考スルニ可キ事ナリ

一明治十年十一月十二日引合証人カ第二號ノ二書翰ノ辨解ニ三月
 ニ至リ中西長藏引合人方へ來リ涙金云々トアリテ三月五日始メテ
 引合人方へ來リシ如ク相見ハ右中立ハ其ニ證據ニ適當ニサレタリ
 第一書翰文詞ニヨレハ三月五日始メテ談判セシニ非ス第二涙金云
 々等ノ儀ハ絶テ關係ナキハ之ヲ臨時造意ニ虛言ナルハ該書翰ニ
 右様ナル義見ルヘキナリ第三初審ニ於テハ論地ニ附帶セシ桑代ナ
 ルコト申立又被告控訴狀中ニモ同以テ桑苗代價法注トスル旨ヲ述
 ベリ然レハ桑苗代價ノ文通ナルコトハ疑ハ容レズ而シテ被告ハ三月
 至リ桑苗代價の掛合アルニ期限後ナレハ其効ナキ旨ヲ主トシテ
 ナリ原告ハ該書翰ノ文詞ニヨリハ其爾前ニ掛合中ニシテ桑苗代
 價ハ論地ニ附帶セシ契約ナレハ該事件整ハスシテ特リ地所ニ受戻
 得ヘキ旨ナキ旨ヲ答辨ナリ

右ノ次第ニ付桑苗代價ノ義ハ受戻シノ掛合ト均シク當訴ニ於テ之ヲ緊要ト謂サルヲ得ス

然ルニ東京上等裁判所ニ於テハ之ヲ不問ニ附シ併セテ証人カ其証據ニ適當セサル申立ヲ以テ之ヲ正當ト看認ラレシハ看認ムヘキノ廉ナキモノナレハ審理ヲ盡サ、ルノ裁判ト思考ス

右ノ如ク東京上等裁判所ノ裁判ハ其理ヲ盡サス聽斷ノ定規ニ乖キ不法ノ裁判ナルニ付破毀セラレシヲ乞フ

被告 城所庄五郎代人小木半兵衛答辦ノ要領

第一條

東京上等裁判所ノ判文中被告^{今時}原告^{今時}カ論地ノ請求ヲ被告第一號証ノ期限内云々中畧論地受戻シノ掛合受タルヲ無之旨ヲ主張云々迄ヲ標舉シ引合人ノ緊要ナルヲ并ニ引合人ノ申立終タル後ハ原被ニ於

テ其口供ハ道理ナクシテ拒ムヘカラスト論シ明治十一年一月十二日引合人ノ申立中論地ニ付引合人ヨリ原告^{今時}被告^{今時}ニ談示有之モ原告ニ於テハ聞届難旨相答其他引合人ト被告ノ間ニ有之談判ハ原告ハ之ヲ知ラサルモノト拒モ其拒ムノ道理ヲ有セスト豈夫然ラン哉論地向フ三ヶ年置据ノヲ十年二月初旬引合人夫以テ申來ルモ其儀ハ被告於テ承諾致シ難シト答マリ又引合人ノ初審終審ノ口供モ符合セリ只十年二月六日付原告証據トスルハ引合人ト原告ノ間ノ文通ヲ以テ強テ被告ニ關係ノモノトスルモ右引合人ハ固ヨリ被告代理人ニナク又右書翰ハ被告カ指揮シテ爲サシメタルニ非ズ引合人ノ專斷ニテ原告トノ間ニナレルモノタルヲハ引合人ノ初審終審ノ口供ニテモ明瞭ナリ然ル以上ハ引合人ト原告ノ間ニナシタル談判ハ知ラサルモノト拒絕スルモ何ノ道理ニ違フト爲ノ裁原告第二號

ノ二証トスル書翰ハ期限後ノコ而已ナラス此亦引合人原告ノ間ノ
 コ故被告ニ於テ關係ナシ又原告カ陳述ニ代人ハ其順序ヲ經サル者
 ニテ訴訟對審ヲ得ヘキ道理ナク安ソ能ク証人ノ申立ヲ拒ムヘキ程
 ノ詳明ナル事實ヲ証シ得ヘキノ道理アラシト言フト雖モ何ソ東
 京上等法術ニ於テ例規ニ違ヘル代人ヲ立ヘキ願ヲ聞届ンヤ其許可
 ナ得スシテ審庭ニ望ミ對審ヲ爲スノ理ナキハ論ヲ不待ナリ固ヨリ
 其許可ヲ得テ代人トナリシ上ハ訴理ノ辨解ヲナスノ權アルモノナ
 リ故ニ東京上等裁判所ノ判決ハ至當ナルコト明ナリ

第二條

同判文中引合人梅原兵藏ニ於テモ論地ノ受戻シテ被告ヨリ掛合受
 マルコ無之云々中畧証明スル上ハト迄ヲ提出シ之ヲ駁シテ右引合
 人ハ元來被告人最親ナル姻屬ナレハ該訴ニ就テ被告ノ爲メ利ヲ圖

リ不利ヲ避クルハ其情ニアリ云々ト抑該訴ニ就キ引合人ノ必用ナ
 ルコトハ被告ノ爲メニアラスシテ尤モ原告ノ爲メニアリ如何トナレ
 ハ原告ノ證據トスル第二號ノ一第三號ノ二書翰ハ引合人ト原告ト
 ノ間ニ爲シタルモラニシテ之レヲ今次ノ被告ニ關係之證據ニ立シ
 コキ企テシヨリ初メテ其引合ニ要シタルモノナレハナリ故ニ原告
 ニ於テ初ニ該訴ニ引合人ノ緊要ナルコトヲ論シ而シテ今ニ至リ其引
 合人カ被告ノ爲メ利ヲ圖ル者ト論スト雖モ固ヨリ該地ハ賣渡シノ
 モノナルヲ明治十年二月初旬原告ノ爲メニ引合人ヨリ被告ニ向フ
 三今年置据ノコトヲ相談アルモ被告ニ於テハ不承諾ノ段答ヘタル而
 己ニテ前條ニモ具陳セシ如ク被告ヨリハ引合人ニ該地取扱ヲ依頼
 シ或ハ書簡等ヲ送附スヘキ旨指揮等致シタルコト之レ無ク故ニ引合
 人ハ原告ノ爲メ必要ニシテ被告ニ於テハ前陳ノ如ク關係ナシ殊ニ

原告証據トズル十年二月六日附第二號ノ一書簡中ニモ受戻ノ文字
 ナ記載セズ况ンヤ其實論地ハ被告ニ於テ買受タルモノニテ引合人
 モ受戻ノ談判ハ原告ヨリ受ケサル段上申ニ及ヒタルニ於テチヤ由
 是之レヲ觀レハ原告ニ於テ証據トスル第二號ノ一ノ文中受戻ノ文
 字ナキモ置据受戻シノ兩條ノ意味ヲ含蓄セリト強テ論說スルモ前
 顯辨論スル如ク其理ナキヤ不待論ナリ然ル上ハ引合人カ姻屬ノ情
 ナ以テ被告ヘ利ヲ與ルトノ陳述ハ頗ル想像ノ說ト云フヘシ且原告
 証據トスル第二號ノ二書翰モ論地取扱ノ權限ヲ被告ヨリ與ヘラレ
 タルコトナキ引合人ヨリ原告ヘ遣シタルモノ故被告ニ於テ知ラサル
 ハ勿論ノコトナリ併シナカラ今假ニ此書面ハ被告ノ知レルモノトシ
 論スルモ十年三月ハ己ニ論地買戻シノ約定期限ヲ經過セシ後ノコ
 ナリ殊ニ其文中買戻ノコト承諾シタル証據ナシ別ニ該書面ヨリ生

シタル買戻シノ承諾爲シタル証ナクシハ此ヲ以テ論地ヲ受戻シ對
 談違シ証トスル理アラシヤ又該文中ニ昨日トアルハ五日ヲ差シ先
 日ヨリ度々トアル上ハ五日ヨリ前ノ事トスルモ此書簡ハ引合人原
 告ノ間ニ於テシタルモノニテ被告ハ其文体ニ依ルモ五日ニ初テ掛合
 手受ルモノナリ此時ニ際シテ引合人ハ原告ノ代人則原告人ニ見
 掛合手得大然シハ先日度々トアルコト引合人ニ於テハ承諾致シタ
 ルコトモモ此ハ原告引合人ニテ空シク三月五日迄被告ヘ掛合セ
 サルハ原告ニ於テ其期限ヲ經過シタルモノナリ

第三條

同判文中被告今時原告第二號ノ二第三號ノ二ノ二書簡ハ引合人ノ考ナ
 以テ被告ヘ送リタルモノニテ原告之レヲ知ラサルモノナル旨証明
 スル上ハ迄テ記載シ二書簡ノ辨解ヲ爲シ原告人ハ該件ニ付テ等閑

セサル儀ハ右書簡ニテ明瞭セリト論スト雖モ該書簡ハ引合証人ノ
專斷ニナリタルモノ且第一二條ニ於テ辨明セシ如ク右二書翰ヲ以
テ期限内ヨリノ掛合ナルヲ表スヘキ証據ニ立サルナリ

第四條

同判文中明治十年一月廿七日ヨリ追々掛合中ナリトノ事ハ云々中
略被告〔今時〕第一第二號ノ証ヲ以テ原告〔今時〕ハ對シ論地ヲ受戻スノ
權利アリトノ被告申分難及採用ト迄ヲ掲載シ判文前項ニ受戻ノ掛
合ナキト二號ノ証ハ被告ノ知ラサル旨証明スル上ハトアル趣意ニ
因レル判文ナルヘシト雖モ前陳ノ如キ事情アリ然ルニ之レヲ不問
ニ附シ右ノ如ク裁決アリシハ未ダ其事理ヲ審明セラレサル者ニ於
テ不盡ノ裁判ナリト論駁セリ然モ前陳ノ如キ事情トハ姻屬ノ情ヲ
以テ被告ニ利ヲ與フル等ノ義ナルヤ右ハ第二條ニ辨解セシ如キ次

第ナルヲ以テ原告ニ於テ定約期限ヲ經過シナカラ被告ニ於テ關係
ナキ引合人ト原告ノ間ニ應答ナシタル書簡ヲ以テ終審ノ裁判ハ不
盡不當ノ趣キ上告ニ及フモ被告ニ於テハ前條々ニ陳述シ且東京上
等裁判所ニ控訴シタル主旨ノ如ク論地ハ已ニ賣渡ヲ受テ只返リ証
ヲ差出アルモ其証書ノ効用ヲナスヘキ期限ヲ經過セシ以上東京
上等裁判所ノ判決ハ適當ノ裁判ト思考セリ

原告代人 山田泰造陳述ノ要領

被告答辨第一條ニ對スル陳述
一被告ノ要領ニ引合人ノ初審終審ノ口供符合セリ故ニ引合人其原
告ノ間ニナシタル談判ハ知ラサルモノト拒絶スルモ何ノ道理ニ違
フトセシヤ
右引合人ノ口供初審ト終審トハ符合セスシテ甚ダ齟齬セリ而シテ

被害公初審裁判ヲ不服ニテ控訴ヲ爲シ其上証人審理ヲ請願セシテ
 リ即十年十月十二日附テ以テ原告ハ尙初審ノ如ク裁決アラソ
 送乞願セシナリ十二年十一月十日供述然ルニ被告ハ窮テ証人審理ヲ請願シテ
 カ及及其申立ヲ謂フナク拒テ加之異拒テ命ル主意ハ條理ハ抗辨
 ニ非スシテ事實ニ右等事實ヲ拒テ道理ナキ明カナリ今試ニ佛國
 訴訟法ヲ參照スルニ訴訟理相均致ス
 出被害公控訴テ東京上等法衙ニ於テ例規ニ違ヘル代人ヲ立ヘキ願ヲ
 開届出ヤ其許可ヲ得スルニ望ミ對審ヲ爲シ以テ論ヲ不
 得ニ候固キ其許可ヲ得テ代人ヲ立シテ上訴理ヲ辨解スルニ
 權承テモ茲ニ十年十一月廿二日ニ於テ對審地ニ原告及被告引合人
 申立ヲ以テ判定セラソメテ同日原告代人トアルハ

乃チ要旨ニ陳スル如ク公正ノ代人ニ非ス然ルニ被告ノ上等法衙ノ
 許可セシ上ハ對審ヲ得ルノ權アル旨申立シテ其許可アリシハ乃チ
 不法ナリト思考ス右ノ如キ當日代人カ對審ヲ得ヘキ法律アルコト
 シ又訴理ノ辨解ノ如キハ或ハ爲シ得ヘキモ決シテ事實ヲ証シ得可
 キ答ナシ故ニ右申立ハ當時詐僞ニ非サレハ臆察ナク仍テ証人事實
 ノ申立ヲ拒ミ得ヘキ道理ナキ確然タリ如斯場合ニ在テハ特リ當日
 代人ノ能ク辨ス可キニ非ルヤ不較論ナリ
 但右申立ノ真正ナラサルコトハ終審判決後原告ヨリ城所庄五郎及
 梅原兵藏ニ對シ八王子警察署ニ吟味願ヲ爲セシテ被告本人引合
 人ニ於テ吟味ヲ受タル節原告ヨリ受戻シ及桑代雜費ノ掛合アル
 一各申立アリテ終審ノ申立トハ悉ク相違セリ故ニ真正ノ供述ニ
 アラサルナリ

同第三條ニ對スル陳述

一被告ニ於テ「抑該訴訟就キ引合入ノ必用ナルコト」被告ノ爲ニアラ
 スルテ先モ原告ヲ爲ニシテ如何トナシテ原告ノ證據トスル第二號
 ノ三號ニ書簡ハ引合入ト原告トノ間ニ爲シタルモノニシテ之
 ナク次リ被告ニ關係シ證據ニ立シコト企テシヨリ初メテ其引合
 要ムコトモシテ「右ハ被告ニ於テ証人ノ性質ヲ誤認セシ者
 ト思考ス抑原告ニ於テ結約者即被告ヲ關キ無謂証人ト談判ヲ爲ス
 如キ迂遠ナル時何コ好テ之ヲ爲サシ必ス不得止シ事情アルヲ以
 テ其止得テ所以乃チ被告カ事故ヲ以テ避タル故ニ原告
 不証入タル梅原兵藏ハ掛合ヲ爲タルナリ豈之ヲ不當ト云可シヤ凡
 ソ契約義務者保證タルヤ其義務者タルモノ一方權利者ノ爲メ其
 契約ニ違ハサルコト保證スル者ナリ」〔古來ヨリノ習慣ナリ〕然ラハ本人義務者

ノ事故アリテ其約ヲ遂得サルキハ証人タルモノ其責ニ任スベキハ
 當然ノ筋合ナルヘシ然ラハ該訴ノ起因タルヤ原告ハ約定期限ニ際
 シ談判ヲ爲スニ必要ナル被告カ事故ヲ以テ避タルコト証人タル梅
 原兵藏ニ談判セシナリ故ニ被告カ在不在疾病等ノ事故アリ不得止
 場合ニ有テ証人ハ原告ノ爲ニ遂得セシタルノ義務アリテ被告
 ハ之ヲ拒ムノ道理無クシテ是嚮キニ被告ハ引合人ヲ信認シテ保證
 上爲シタルコトナリ故ニ該訴審問ニ及ヒ始メテ被告ハ關係ノ証人
 引合人ヲ要シタルコト無之又引合人ハ被告ハ証人トシテ被告
 ノ關係ナキコト能ハサルナリ

同第三條ニ對スル陳述

一右ハ原告ニ於テハ已ニ上告要旨ニ盡シタルヲ以テ特ニ辨解ヲ要
 セサル様相心得候尤原告主張スル廉ハ豫テ申立ル如ク引合人ヲ以

テ被告へ掛合タルニ被告ノ爲ニ期日遷延セシ者ナレバ決シテ原告
ノ等閑ニシ無之其事由ニ乃至要旨陳述ノ通りナリ

被告代人 小本半兵衛陳述ノ要領

引合人ノ口供初審ト終審トハ符合セズ云々トアレハ引合人ノ口供

初審終審符合スルトハ原告証第二號ノ一書簡ハ三ヶ年置据ノイハ

被告ニ謀ルモ承諾ナラズ依テ其斷ニ送リタルト云フ又三號ノ二書

簡ハ期限後三月六日引合人專斷ヲ以テ送リタル書簡ナリト云フ

初審モ終審ヲ申立ニ符合セリト云フノ意ナリ個々其口供及始末書

ニ就テ判然ナリテ思考大ニ違フ

第三條ニモ照スルニ被告ノ陳述ハ原告ノ陳述ニ非ズ

八王子警察吟味願云々ヲ申立シ共個ハ全ク依法正當ノ吟味ニ非ズ

其証ハ明治十年十二月三十一日ハ事務休暇時ナルニ卒然同夜巡
査泥靴ノ儘被告庄五郎居宅ニ踏込矢庭ニ拘引其儘明治十一年四月
迄拘留ニテ吟味ヲ受タリ右ハ不當ノ吟味ニ付横濱檢事局へ其理由
提出申セシ處全ク八王子警部ノ失錯ナレバ原告共ノ願ハ採用セズ
其方ニモ御用無之又警部ノ失錯ヲ其方残念ニ思フ訴出ルモ妨ケ
ナシ申懇々命セラレタリ右ハ事實ニテ原告ノ上申ハ相違スルナラ
然レ共個ハ本訴ニ要用途ニ非ズ思考大ニ違フ

第三條ニモ照スルニ被告ノ陳述ハ原告ノ陳述ニ非ズ

約定期限ニ際シ談判ヲ爲シ必要ナル被告カ事故ヲ以テ避タル故証

人タル梅原兵藏ニ談セシナリ云々論スレハ本訴原告証第一號約定

期限ハ明治七年二月ヨリ十年二月迄以三ヶ年内ハ何時モ被告

ノ都合次第責戻スヘキ特別ノ契約ナリ此ノ三ヶ年ノ期限ヲ原告忘

〇テ經過セシモノナリ又明治十年三月六日被告カ不在ナリト云テ
 言葉ヲ探テ二月二个月皆不在ナリヲ思フ原告ノ條理ヲ誤ル事甚
 シキモノト思考スルニ至リ又被告ノ本籍地ニ在リテ其ノ本籍地
 〇引合人ハ梅原兵藏陳述ニテ被告ノ本籍地ニ在リテ其ノ本籍地
 該訴ノ地所向三ヶ年間置据ノ儀被告人方ヘ掛合ヒ吳度旨原告ヨリ
 依頼受テタルハ明治十年三月初旬ニ其頃被告本人城所庄五郎ハ
 病ニ罹リ平臥中キルヲ以向人倅城所庄五郎ヘ談判セシ父庄五郎
 於テ置据ノ儀ハ承諾致サテ其期限ニ至リシニ付返地可致テ以テ
 桑代ノ外ニ諸雜費ヲ償ハサレハ返地致シ難キ旨申ニ依リ其段三月
 六日附テ以テ原告人ニ及交通シテ被告ノ本籍地ニ在リテ其
 〇明治十年三月二日カ二日ト覺原告ノ親戚ナル中西長藏カ自分方
 〇罷越シ兼テ被告ヨリ原告カ負債ノ金五百圓ヲ涙金トシテ原告方

〇受取切リニナシテ該地所ヲ被告ヘ渡シ切ニ致シ度旨申スニ付談
 判ノ爲メ被告ノ倅庄九郎ヲ喚ニ遣シタルニ同人ハ東京ヘ罷越シ居
 不在ノ越キ申越シタルニ付長藏ハ其儘立歸リタリ然ル處頓テ被告
 〇妻ナル者罷越シ庄五郎ニ委細申聞セタルニ最早期限經過シタ
 〇該地受戻サス可キ理ハナケレモ倅庄九郎歸宅ナサハ相談致シ可
 申下申聞ケタリ
 〇明治十年三月五日ノ夜庄九郎歸宅セシニ付前顯涙金トシテ云々
 〇儀ヲ申聞ケタル處金額多分ノ相違ナルニ付受戻サス可キ儀ハ承
 諾難致トノ答ニ付明治十年三月六日附ノ書簡ヲ以テ中西長藏方ヘ
 申遣シタリ
 〇明治十年三月九日カ十日ト覺原告ヨリ桑代ヲ百圓ト積リ元金
 〇トモ合七百七拾五圓ニテ該地受戻度旨申越セシヲ以テ庄九郎ヘ及

談判シ處同人ニ於テ庄九郎ト談シノ上巳ニ期限後ニ付受戻シノ談
 シニハ應シ難キ旨斷言スルニ依リ其段原告人へ及通達タリ
 一明治十年二月中ニハ原告ヨリ該地受戻シノ掛合ヲ受シ事ハ之レ
 ナシ
 一明治十年三月六日後ニ於テハ原告ヨリ桑代ノ儀ハ申入タル事之
 ナシ五百圓ヲ涙金トシテ差入レ可キトノ掛合ヲ受シ儀ノミナリ
 一初審裁判所ノ口供ハ心得不申上等裁判所へ差出セシ口供ハ總テ
 相違之レナシ
 一庄五郎ハ病氣ニテ他行致シタル儀之レナク庄九郎ハ商法ノ爲一
 个月ニ六度ツハ東京へ罷越シタル儀之レアリシナリ
 一引合人ハ梅原兵藏申立ニ對シ山田泰造陳述ノ要領
 一梅原兵藏儀初審ノ口供ハ心得旨申立ノ旨己ニ終審ニ於テ對審

ノ初原告カ初審ノ口供ヲ讀上シ節右口供ハ相違ナキ旨ヲ陳タリ而
 シテ又右口供ハ申立違ナリト云ヒタルノミニテ相違ノ廉ヲ証スル
 程ノ確言ハ無リシナリ然レハ心得サルトノ申立ハ其當ヲ失シタル
 ノ旨ニシテ頗ル事理ニ乖ケリ
 一又二號ノ二書簡ニ附テノ申立ニハ十年三月二日頃中西長藏ノ談
 判ヲ受タル處被告ノ倅不在ナリシカ三月五日夜同入歸宅セシニ
 ヨリ其翌日返答セシ旨ノ申立ニ有之候然レハ終審ノ申立ニハ被告
 人ノ倅不在中ナルヲ以テ其旨申遣シタル旨ニ有之候
 一三月二日談判受ルモ被告ハ期限後ニ付返地セサルナレハ倅不在
 ナルヲ以テ云々若シ果シテ然ラハ直チニ其旨有体通知スヘキ筈ナ
 ルヘキ期限後云々ハ右書簡文中ニハ無之故証據ニハ不適モソト思
 考ス

三月六日後ハ桑代ノ掛合無之旨申立候然ル上ハ其以前ニ在テハ桑代ノ掛合ヲ爲シタル者ニテ終審ノ口供ニ桑代云々掛合ヲ爲シタルノ申立有之然レハ期限内ヨリ連々掛合ヲ爲シタル儀ト相見ユルナリ

右ノ如ク引合証人ニ於テハ初審終審及當大審院ニ於テ申立ル處各異同アリ是他ナシ其事實ヲ蔽フコト欲スルモ其端緒ニ表ハレ彌縫シ能ハサルノ証跡ト思考セラル抑詞訟ノ主旨タルヤ終始一ナラサル可ラス又引合証人ノ証言モ終始變違アル可ラス其審庭ニ更移スル毎ニ其供述ハ異ナルニキ筈ナシ然ルニ此ノ如ク始審終審相違シ大審院ニ於テモ異同有之候間冀クハ其証憑ヲ熟視明察アラベシ事ヲ冀メ又

上告ノ主點ハ左ノ條件ナリトス

第一 公正ノ代人ニ非サル被告代人〔控訴〕小水半兵衛カ東京上等級裁判所ニ於テノ申立ハ無効ナルモノナリトノ事〔上告要領第二項〕

第二 引合証人梅原兵藏ノ証言ハ事實ト證據トニ反スルモノナリトノ事〔上告要領第六項第七項第八項〕

第三 原告〔控訴〕證據第三號ト第二號トニ書簡ヲ被告人〔控訴〕於テ承知シタルモノナリトノ事〔上告要領第十三項第十四項第十五項第十六項〕

第四 東京上等級裁判所カ證據適セサル証人ノ申立ヲ正當ト看認スル原告〔控訴〕申立ヲ採用セザリシハ不法ナリトノ事〔上告要領第九項第十項第十一項第十二項〕

又第一條

明治十年十一月十二日証人ノ吟味終リタル後ニ被告城所庄五郎〔控訴〕

原告ハ証人ノ申立ヲ拒メリ然レモ右ハ之ヲ拒ムヘキノ道理ヲ有セス
 又拒ムヘキノ必然タル事迹ヲ發見セサルナリ加之被告代人〔控訴〕小
 木半兵衛ハ戸長カ保証セシ公正ノ代人ニ非ラサルヲ東京上等裁判
 所ニ於テハ之ヲ以テ詞訟代人ノ効力アル者ト看認メ裁判セラレシ
 ハ不法ナリト上告スルト雖モ東京上等裁判所ノ書類ヲ閱スルニ被
 告城所庄五郎代人〔控訴〕大谷徠助カ明治十年十月十二日ノ口供第二
 項ニ明治十年二月二日梅原兵藏ヨリ被告〔黑沼〕依頼ノ趣ニテ論地向
 三ヶ年置据ノ一ヲ依頼アリタレモ原告〔城所〕承諾不致旨相答セ
 タリトアリ第二項ニ被告第二號ノ一第二號ノ二ノ書翰ハ梅原兵藏
 等被告トシ間ニ有之モノニテ原告等之ヲ知ラサルモノナリトアリ
 第四項ニ該論地ニ証人ヨリ置据ノ事ヲ掛合受ケタル外買戻ノ義ヲ
 掛合受ケタル義ハ無之トアルニ依リ東京上等裁判所ハ該口供ニ依

リ該裁判ヲ與ヘタルモノニシテ明治十年十一月十二日ノ城所庄五
 郎カ當日代人小木半兵衛カ申立ノミヲ以テ判決ヲ爲シタルモノニ
 非サルヲ知ルヘシ左スレハ假令公正ノ代人ニ非ラサル小木半兵衛
 等申立ヲ聽キタレバモモ該裁判以當否ニ關係セザルモノト付上告
 大カ主張スル所ヲ以テ該裁判ヲ破毀スルノ理由ト爲ス可ラザルモ
 以テ上告トスル所ニテハ之ヲ無効トシテ之ヲ破毀スルノ義ヲ有ス
 第三條東京上等裁判所ノ審判ニ對シテ原告等ハ該裁判ヲ破毀ス
 引合証人梅原兵藏カ東京上等裁判所ニ於テノ証言ハ初審ニ於テ
 申立ニ相違シ事實ト證據トニ適セザル無根ノ言ニシテ證明ト云フ
 事得カザルヲ以テ東京上等裁判所其證明ヲ以テ確定ノ判決ヲ
 爲セシハ不法ナリト上告スルト雖モ梅原兵藏カ東京上等裁判所
 於テノ口供ニ初審裁判所ニ於テ對審ノ節十年五月廿九日引合人申

立テタル口供ハ只今被告カ讀上ケタル口供寫之通ニ有之右口供ニ受
 戻トアル當時引合人ハ右様ノ申立ニ以テ無之ヲ存候得共口供ニ調印
 アルハ全申立違ニテ該地被告ヨリ受戻ノ掛合ヲ受シハ十年二月中
 一切之ナシトアルニ依レハ梅原兵藏終審ノ供述ヲ以テ初審
 於テ申立ハ全ク誤謬ニ出テタルモノナルヲ証明シタルヲ知
 ルヘシ左スレバ東京上等裁判所カ梅原兵藏ニ於テモ論地ノ受戻ヲ
 被告ヨリ掛合請ケタルヲ無之云々証明スル上ハ被告ニ於テ論地請
 戻ヲ明治十年一月廿七日迄追及掛合中ナリトシテ事ハ特リ被告申
 立迄止リ云々被告申分難及採用ノ判決モ不法ヲ裁判シ非テ
 誤トス

第三條
 原告〔控訴〕證據第二號ノ一第二號ノ二書簡ハ被告人〔控訴〕ニ於テ承

知シタルモノナル旨主張スルト雖モ右ノ書翰ハ引合人梅原兵藏カ黒
 沼喜右衛門ト中西長藏トニ差贈リタルモノニシテ被告人〔控訴〕ヨリ直
 チニ原告人〔控訴〕ニ談判ヲ爲シタルモノニ非ラサルニ依リ其書中ニ
 何等ノ義記載致シアリテモ被告人〔控訴〕於テ之ヲ知ラザル旨申立ル
 上ニ其書簡ノ云々ヲ承知シタルモノト爲テ得ス左スレバ東京上等
 裁判所カ明治十年三月以内ニ被告ヨリ原告ニ論地買戻ノ掛合請爲
 シタルノ證據無之ト判決セシム不法ノ裁判ニアラストス

第四條
 東京上等裁判所カ證據ニ適セザル証人ノ申立ヲ正當ト看認メ原告
 ノ申立ヲ採用セサリシハ不法ナリト上告スルト雖モ原告證據第二
 號ノ三梅原兵藏ヨリ黒沼喜右衛門宛テ書翰ニ其時以一條ノ義先方
 ニ談判イタシ候處證據ノ義ハ承知ニモ相成兼候ニ付云々トアルヲ

觀レハ原告人カ梅原兵藏ヲ以テ置据ノ談判ヲ爲シタルハ明瞭ナリ
 トス左スレハ假令第二號ノ二書翰ノ文意ヲ以テ買戻ノ談判ヲ爲シ
 タルヲ見ルヘシト雖モ第二號ノ二ハ三月六日付ナルニ依リ被告人
 於テ約定期限内ニ論地請戻ノ掛合ヲ受ケタルコトハ云ヒ証人
 梅原兵藏ニ於テモ明治十年二月中ニ該地受戻ノ掛合ヲ受ケタルコト
 一切無之ト申立タルハ原告第二號ノ一第三號ノ三ノ証據ニ適シタ
 ル申立ナリトス故ニ東京上等裁判所カ論地買戻ノ期限ヲ明治十
 年三月以内ニ被告ヨリ原告ヘ論地買戻ノ掛合ヲ立シタルハ証據無
 之モト看認シ被告申分ハ難及採用原告申立ノ通可相心得テ判決
 セシ然不法ノ裁判ニ付テハ其ノ非ヲ以テ其ノ中ニ
 右ノ如クナルヲ以テ東京上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナリト

裁判判決

ス

第七號

○地券請求一件上告ノ判文明治十一年一月廿六日申渡

原告 千葉縣下上総國山邊郡五箇村 富田村平民嘉須里文左
 被告 同縣下同國同郡經田村 平民綿織甚左衛門外一

東京府下淺草區淺草
 馬道町七丁目四番地
 平民

被告

千葉縣下上総國山邊郡

稻葉克寬

永田村平民

齋藤五郎作

千葉裁判所ノ判文

第一條

原告訴フル地所其初富田經田兩村ノ者共名受地トスルハ慶長十六
 辛亥年水帳ニ記載有之ヲ以テ證據ナラズ然レ其後右ニ記載セル田
 畑ノ反別不同ヲ生スルニ依リ元祿寶永度ノ名寄帳正實トシテ村
 役場之ニ送用セシ慶長ノ水帳ニ廢止シ被告ハ右名寄帳ニ記載有之
 ニ依リ自分所有地ノ證據トス其際元祿度以前舊地頭石來織部ヘ一
 旦右地所引揚ラレシ廉ハ原被告口供符合スト雖モ原告ノ方ニ引續下

分渡シタルヤ被告ニ拂下ケタルヤ確証無ケレハ双方申分信ヲ取ル
 事定ラテ而村役場右名寄帳ヲ當今ニ至ル迄之ヲ用ヒ來被告ノ貢租
 額之ニ據テ収納シ來シム元祿後ヲ証スルニ確ナルモノトス
 子ハ中第二條其五ノ事ニ照シテ出願人ノ主張ハ
 前條貢租諸役共原告ニテモ從來相勤ル旨申立ルト雖モ寶永七年以
 來右論地頭三給三分シタルコトナシ隨テ村吏ハ三名アリテ各
 自ニ取立タレシニ原告貢納ノ証トシテ出ス受取書ハ三給ノ内舊神
 谷組ト唱ル名主一名ノミニ納メタルモノニシテ仮令三給ノ分一手
 ニ納メタルト看做モ當時役場貢租取立帳ニ符合セズ被告所持セル
 受取書ハ毎歲三通ツ之アリ當時村役場貢租割付ニ符合シ且被告
 并村役人ノ申立テニ據シテ元祿以來右地所名寄帳ニ被告ノ名前ニ
 相成リ原告ヨリ被告ニ相渡スルキ小作米ヲ神谷組一手ニ直ニ原

管ヨリ貢納致サセタル節ノ受取書ニテ五郎作分貢租ト相認ムヘキ
略書ナリト云ヘリ原被二重ニ請取書アル可カラサレハ事理ニ於テ
應ニ然ル可シ只國役金川役金等地主ニテ擔當スヘキモノ原被交互
ニ相勤タルハ推究スヘキ緣故ナケンハ這般裁判ノ憑據トスルヲ得
ズ

第三條

寶曆九己卯年二月中原被告此論地ニ付爲取替置タル濟口証文寫ニ
原告小作タルヲ記載有之右ハ被告先代江戸宿ノ者ト慣シ合テ作ル
モノト申立ルモ其証トスルモノ無ク又出訴ノ本人死後ノコニテ事
實相違セル旨ヲ申立ルト雖モ右ハ本人死後親類出訴ノ濟口タルヲ
明ナリ其後納來ル貢租諸役米ト唱ル納方右濟口書中ニ記セル年貢
小作米ト符合シ其年度以來約定ノ通履行シタル事判然タリ殊ニ右

濟口証文ハ原告方ヨリ差出タル儀相違ナキ旨申立ル上ハ村役場ニ
テ廢シタル古帳ヲ以テ今更小作人ニ非ストシテ之ヲ消滅スルヲ力
ヲ無キモノトス

第四條

前條ノ據可キ證據ト理由ヲ以テ推究スレハ元祿度以來被告齋藤
五郎作ノ所有ニ歸シタルヲ原告方ニテ小作致シタルモノトス仍テ
原告齋藤氏ハ地券請求ノ權利無之モノト心得可シ
東京上等裁判所於去事
明治九年三月三十一日

被告原告其嘉須里突左衛門外七人總代今關喜兵衛代人秋場源右
衛門控訴ノ要領
明治九年五月二日

原告其嘉須里突左衛門外七人總代今關喜兵衛代人秋場源右
本訴ノ主趣ハ被告村方永田村字森分於元重田四反七畝拾壹步

下畑九反九畝拾四步合反別壹町四反六畝廿五步ハ原告人共八名ノ
祖先草創ノ地ニテ從來所持致貢租諸役等年々永田村役場へ差出シ
來リタリ

數枚ノ内其一枚ヲ掲ク
御年貢納之事

一本壹斗九升三合

長田

治郎右衛門

森分川田

清右衛門殿

且往昔ハ公用人馬相勤ムル處他村ノ儀ニテ差支テ儀有之ニ付正
徳年中ヨリ諸役錢其外公用人馬ニ至ル迄年々米三俵貳斗ヲ以永田

村役人へ相任セ可取賄等ニ對談致シタル趣最貢租等ハ神谷組ト唱
ツル村役場へ可相納旨名主ヨリ達シ有之ニ付右様取計タル由申傳
有之爾後役米ハ約定ノ通相納シ寶曆度該地ニ付爭訟以後貢米貳俵
貳斗八升并前書諸役米三俵貳斗差加谷米六俵八升永壹貫七百七
文其餘國役金歩料金川役金先納金貢米運送駄賃ニ至ル迄差出シ
數枚ノ内其二枚ヲ掲ク
御年貢諸役不殘相濟申候爲念如斯ニ御座候以上

永田村

寶曆九年卯十二月五日

市五郎印

然^レ至^ル明治五壬申年地券發行ノ節ニ至^リ被告五郎作於テ前書ノ地所ハ同人所有天旨申立候儀ニ有之抑右地所ハ証據物乙第一號ノ通り慶長十六辛亥年水帳ニ富田經田兩村ノ者共名受地ナルヲ判然^ニタ^リ茲^レ爾來數百年間貢稅差出シ今日ニ至^リ突然所有ノ權ヲ失^フ道理無之難捨置ニ付前書田畑合壹町四反六畝廿五歩ノ地券ハ原告ヘ下渡^ル成^ル様初審千葉裁判所^ニ及^テ出訴^ス成^ルニ被告於テ右地所ハ元祿度前年曆不相分地頭^ニ悉皆引上^テ之^ヲ其節被告於テ拂下致^シ更^ニ原告^ニ小作致^サ夫^レ儀^ニ亦^レ存^ス等^テ次第^ニ元祿寶永度名寄帳并^ニ寶曆度原被爲取替置^テ証文等^ニ明瞭ノ旨申立^テ下^ニモ右^ノ延寶年中水難^ノ爲^ニ貢租不納致^スニ付地頭石來織部^{ヨリ}上地被申付其

節永田村役人共於テ地頭^ニ歎訴ノ上從前ノ通地所下ケ渡^シ相成依^テ永田村堰橋々修覆ノ爲金五圓同村役場^ニ差出^シ追テ右受取書ハ紛失致^シタ^リトモ終^ニ原告所有ハ離^レサル儀ニテ且被告所持致^シ居^ル寶曆度濟口証文^ハ其節原告ヨリ差入^{タル}儀相違無^クナ^レ同右ハ事實相違ノ儀書載有之此訴タルヤ被告先代五郎左衛門ヨリ貢米不足ノ儀被申掛^{タル}ニ付寶曆五乙亥年原告先代ノ者共ヨリ右五郎左衛門^ニ相掛^リ及^テ出訴取調中寶曆六丙子年相手五郎左衛門病死致^スニ付其儘相成^{タル}ニ右五郎左衛門俸市太郎親類三郎兵衛ヨリ逆訴致寶曆九己卯年江戸宿共取扱内濟致^シ同年五月中一端裁許相成旨濟口証文^ニ記載^シレ^テ己^ニ死失^{タル}五郎左衛門^ニ裁許申渡^シ可相成謂^レ無^ク之剩^ト原告ノ者共^ニ小作人杯^ト記載^セシ^ハ全^ク被告方於テ江戸宿^ト馴合^ノ上不都合ノ儀ヲ認^メタル旨申傳^ニテ承知

前同條中ニ(舊地頭石來織部へ一旦右地所引揚ラレシ廉ハ原被告口供符合スト雖モ原告ニ引續下ケ渡タルヤ被告ニ拂ヒ下ケタルヤ確証ナケレハ双方申分信ヲ取ルニ足ラス)トアレモ原告ニ於テハ其年度以來引續貢租上納ノ受取証所持セリ然レハ即チ被告方へ舊地頭ヨリ拂ヒ下無之ヲ判然タリ

第四條

前同條中ニ(右名寄帳ヲ當今ニ至ルマテ用ヒ來被告ノ貢租モ之ニ據テ收納シ來レハ元祿寶永後ヲ証スルニ確ナルモノトス)トアレモ元來此反別ハ越石地ニシテ貢米永引ニ當三俵二斗ノ仕切米ヲ以テ被告村役場へ依頼シ置キタルナリ抑出作百姓タルモノハ他村ノ帳簿等閱シ能ハサル慣習ナレハ水帳ノ如ク名寄帳ニモ記載アルモノト存居シニ此事件ノ起發スルニ當リ始メテ名寄帳ヲ閱セシニ自分共

ノ人名ナキヲ看認タリ然レハ即チ之ヲ以テ寶永後ノ証ト認ムルトノ裁判ハ其當ヲ得サルモノト思量ス

第五條

同判文第二條中ニ(右論地ハ地頭三給ニ分レタルコトナレハ)トアレトモ前條陳述スル如ク貢米永外ニ三俵二斗ノ仕切米ヲ以テ悉皆役掛リ等相賄ハセ置タルコトナレハ三給ニ分列シタルコト知り得サルナリ今般紛紜發シタルニ因リ始テ分給ナルコトヲ覺知セリ從來一手ノ神谷組トノニ心得タル故ニ一手貢納シタルモノナリ

第六條

同條中ニ(直ニ原告ヨリ貢納致サセタル節ノ受取書ニテ五郎作分貢租ト認ムヘキ畧書ナリ)トアレモ畧書タルノ証跡毫モアラス年貢諸役ト記載セル受取ヲ以テ小作ノ受取証トハ何ヲ以テスルヤ更ニ其

因ル所ヲ知ラス且國役金川役金歩料金地主タル自分共ニ於テ擔當シタル上ハ之レヲ以テ地主タルヲ明瞭ナリ

第七條

同判文第三條中ニ其年度以來約定ノ通履行シタルヲ判然タリトアレド此濟口証ハ一時村方ヲ治ムル爲メノ示談内濟ニシテ其實ハ水帳筆數ノ通實地自分共所有セリ此確証タルヤ年貢諸役ノ受納証ヲ自分共方へ受取居ナリ

第八條

同判文第四條中ニ原告ニテ小作致シタルモノトス云々トアレド前條ノ如ク膏村方ヲシテ治ムル爲メ示談セシ約定ニシテ其實ハ地主タルヲ前ニ陳述セシ如ク年貢諸入費受取証アレハ判然タリ故ニ實地ニ付テ論スレハ地券請求ノ權利ヲ有スルナリ

右ノ如ク初審裁判ニ服シ難シ仍テ終審ノ裁判アラノヲ乞フ

原告 總代今關喜兵衛外一人陳述ノ要領

被告齋藤五郎作ニ於テ延寶四年二月永田村役人共ヨリ先地頭石來織部へ差出タル手形証ヲ歎願書ト相心得右ノ歎願書原告手元ニ有ル上ハ歎願聞届相成ラサルヨリ下ケ渡シ相成タル旨陳述ナセトモ右証書ハ歎願書ニハ無之延寶三年凶作ニテ年貢不納ニ及ヒ其砌地所取上ノ理解有リ合給村役人共ニテ違作難澁ヨリシテ不納相成タル段訴訟ニ及ヒ聞届ニナリタルニ付右禮トシテ領知堰橋破損修覆金五圓差出且諸役ノ義ハ永田村本百姓并ニ可相勤等ニテ右手形証一通地頭所へ差出タルナリ其後富田村森分名主今關小兵衛方へ永田村五郷役人ヨリ相渡サレ所持セリ即チ左ノ如シ

差上申手形之事

一卯ノ御年貢御納所ニ付森分ノ百姓不屈ノ儀御坐候而御僉議ノ
 上御田地御取上ク被遊候處永田五郷ノ内太郎左衛門五右衛門仁
 一左衛門五郎兵衛右四入ノ者精々御訴訟申上ケ候得者右ノ通ニ御
 田地被下難有奉存候爲御禮ト御領地堰橋々ノ被損被仕遣可申候
 役儀ハ右拾六石ニ付一人ノ出作ノ百姓ヲ立可申候れかむら本百
 姓并ニ役儀相勤可申候御納所ノ義ハ年々九月十月ノ内ニ御納所
 旨詰可申候御免相定可申候ハ急度御皆納被仕遣可申候爲後日
 上札指上ケ仍而如件
 延寶四年辰ノ三月十三日
 太郎左衛門印
 五右衛門印
 五郎兵衛印

五郷總名代

仁 左衛門印

石來織部様御内

吉田九左衛門殿

一始審裁判所ニ於テ論所壹町四反六畝廿五歩ト訴出タルハ舊水更
 津裁判所腰掛ニテ慶長繩受水帳寫取タル節三郎右衛門繩受地田方
 四畝六歩ノ一筆ヲ四畝十六歩ト誤テ其他壹畝十八歩ノ一筆ヲ壹畝
 十九歩ト誤テ貳畝三步ノ一筆ヲ貳畝四歩ト誤テ寫取今般戶長持參
 慶長度水帳本紙ト突合タルニ本日上申ノ論地壹町四反六畝拾三步
 トハ拾貳歩ノ差違ニ相成候事
 一慶長度水帳ニ繩受ケセシ原告共先代ノ人名左ノ如シ

兵 庫

三郎右衛門

源 五郎

源三郎

源次郎

源正助

一助十郎

新五郎

左門四郎

孫三郎

治郎右衛門

次郎左衛門

四郎右衛門

内膳

左門三郎

次郎兵衛

被告 齋藤五郎作荅辨

要領

第一條

村方字森分地所ハ慶長ノ頃原告村方并同郡經田村ノ者共所持致シタル債ハ同十六辛亥年水帳面ニ記載有之然ル處元祿度ニ至リ貢租

未納致スニ付地頭石來織部於テ地所悉皆引上ケ其節自分先代ノ者

ハ拂下相成タルニ右兩村ノ者從來耕作致シタル地所故一併小作

爲致吳ル、様被相頼任其意小作致サセタル旨申傳有之則元祿九丙

子年并寶永七庚寅年名寄帳ハ被告タル自分先代ノ名前ニ相成居爾

來前書水帳ハ役場於テ相用不申尤右水帳記載ノ畝歩ハ元祿寶永度

名寄帳ハ引合ハサレトモ寶永度名寄帳ニ基ク時ハ該原告ハ入附

置タル地所ハ田畑合壹町五反六畝拾八步ニ有之且寶曆七丁丑年被

告先代市太郎親類三郎兵衛ヨリ原告先代ノ者共ハ相掛リ作傳米相

増度等ノ儀及出訴末江戸宿共立入濟方相成同九己卯年双方爲取替

置タル濟口証文中原告人共ニ於テ小作致シタル儀判然記載有之

差上申濟口証文之事

一上総國山邊郡永田村市太郎親類惣代同郡大綱村三郎兵衛方

七九二

同郡富田村七兵衛小兵衛外五人相手取去丑二月中大橋近江守
 様へ御訴訟申上同四月二日御差日御裏御判頂戴仕候出入ノ儀三
 郎兵衛申上候ハ永田村森分川田前地所七人ノモノ致小作候處作
 德米不足ニテ御年貢辨納イタシ市太郎身上相立不申親類共方へ
 引取世話仕候仕合故作德米和増度由并鎮守ノ宮墓所死馬捨場共
 引拂候様爲仕度段申上之候
 一富田村小作人八人惣代小兵衛七兵衛答上候ハ右地所五年以前
 市太郎親五郎左衛門下及出入去ル丑五月御裁許ノ上永田村森分
 川田前田畑八石四斗餘ノ處八人ノ者久敷致小作候儀相違無之候
 間是迄ノ通小作可仕旨且米四斗入六俵餘ノ内三俵餘ハ御年貢三
 俵餘ハ諸役并作德米ノ旨御請証文ニ御書載被下次ニ鎮守ノ宮墓
 所死馬捨場ノ儀先祖共相對ニテ立置候事故以來可障様無之旨五

郎左衛門申上候ニ付不被及御沙汰由被爲仰付候處御裁許和濟候
 儀ヲ相背難澁申掛候間御吟味被成下候様申上之候
 右出入段々御吟味被成下候處双方江戸宿共取扱御願申下ノ内濟
 仕候趣ハ一旦御裁許御坐候事故三郎兵衛願相止森分川田前田畑
 八石四斗餘永小作御年貢諸役作德米共ニ去々丑年御裁許ノ通四
 斗入六俵八升并永壹貫七百七文米永共ニ以來市太郎并諸親類方
 ヲリ相増候儀不申掛次ニ鎮守ノ宮墓所死馬捨場ノ儀モ御裁許ノ
 通双方相守リ是又先規ノ通差置右一件ニ付小作人方へ永々異亂
 不申掛定ニテ出入内濟仕候然ル上ハ向後右ニ付出入ケ間敷儀申
 上間敷候依之扱人加印仕爲後証濟口一札奉差上處仍如件

米津越中守領分

上総國山邊郡大綱

村神谷與次右衛門

知行所

永田村市太郎親類

寶曆九卯年二月 訴訟人 三郎兵衛

柳原彌右衛門知行

所同國同郡富田村

小作人八人總代

相手方 小 兵衛

五郎兵衛

訴訟方宿小傳馬町

三丁目

棟屋

扱人

七 兵衛

相手方宿市谷田町

上州屋

同 半 四郎

御評定所

前書ノ通濟口証文差上内濟仕候上、双方異亂無之候爲後日致與印爲取替置申處仍如件

上總國山邊郡大綱

村

永田村市太郎親類

三郎兵衛印

同國同郡富田村

卯二月

小作人八人総代

小 兵 衛 印

五 郎 兵 衛 印

糖 屋

七 兵 衛 印

上州屋

半 四 郎 印

訴訟方エ

尤小作米永ハ年々被告於テ可受取ノ處同人ヨリ可差出貢租ヘ差向ケ則チ廻シ米ト相唱小作人共ヨリ直ニ村役人方ヘ爲差出タルニ付其時々村役人ヨリ受取書差出タル儀ニ有之然ルニ右受取書ヘ年貢諸役ト書載タルハ全ク一時ノ誤リニテ事實小作ノ請取書ニ相違無

之且該地ハ正徳年中ヨリ舊神谷組一手ノ領地ト相成ル義等ハ決テ無之則チ被告於テ連年三給役場ヘ夫々貢租差出受取書所持致シ居數枚ノ内一ケ年分三枚ヲ掲シ

舊御領所組分

覺

二米拾壹俵壹斗五升

内 四俵三斗四合
壹俵

八升

差引

米五俵壹斗五升六合

中略

右ノ通殘ヲス相渡諸勘定出入無之申候處相違無之候

立會人

御年貢引
同斷五左衛門ト廻ル
内へ渡ス

過

寛政九年己分

次郎左衛門

伊平 治印

五郎左衛門殿内

舊河内組分

覺

一米壹斗四夕

御年貢

一米三升

小米

中略

右ノ通り儘ニ受取皆濟相違無之候以上

取立

寛政九年己十二月廿四日

仁 兵衛印

伊平二殿

御料所組分

五郎左衛門分

一米壹俵壹斗九升九合九勺

御年貢

金壹兩貳分十錢六百三拾六文

地子

通商皆濟出入無之候以上

名主

寛政九年己十二月日

重右衛門印

五郎左衛門殿

沈國役金川役金歩料金爲差出タル儀ハ數十年ノ久特ニ經テ加事故判然難相分先納金ノ儀ハ夏成永上納ノ節被告因究折小作人共

立替相頼置キ年末貢租上納ノ節ニ至リ差引勘定相成儀ニテ又貢米運輸ノ駄賃ハ村方習慣ニテ小作人共ヨリ差出サスル儀往々有之前書ノ如ク被告所有ノ証判然タル上ハ該地ノ地券ハ被告方へ下ケ渡相成ハ當然ノ事ナリ

第二條

原告於テ初審裁判ニ服セテ第一條名寄帳ハ水帳ニ代ルヘキモノニアラス云々ト申立レモ抑水帳ヲ廢スルニアラス水帳ハ一村ノ舊記最肝要ナルモノニシテ村吏ノ私ニ廢スル理ナシ然レトモ永田村ノ義ハ慶長後元祿寶永年間領知替三給或ハ五給此高割明細ハ末文第七條ニアリト分割ス依テ一葉ノ水帳ヲ以テ三給五給ニ分賦スル能ハサレハ水帳ヨリ持主變轉ヲ撰録シ給毎ニ名寄帳ヲ製シ村吏ハ勿論一村真正ノ元帳トナシタルモノナリ然ルチ原告於テ名寄帳ハ獨

貢税取立ツル迄ノモノナリト云ハ名寄帳ノ因縁ヲ知ラサル者ト認定セリ如何トナレハ寶永元祿度給地替アル時々地頭ニ於テ檢地チ大ル下チケレハ新ニ水帳ヲ製スル能ハス依テ當時ノ百姓共持反別畝歩チ正シ銘々押印セシモノナレハ當公租取立ニ具スル人ニシテラズ依テ名寄帳ノ正不正ノ審理アラソトチ乞フ

第三條

原告人共ハ千葉裁判所審判中論所一旦舊地頭石來織部へ引アケラレルコ付歎願シタル處該地下ケ渡シ受タル旨歎願本書ヲ以申立タル素ヨリ歎訴ノ採用相成ルニ本書ヲ所持スル理ナシ且受取書ニ小作ト記載スヘキヲ往昔ヨリ慣習ニテ銘々ヨリ直ニ村吏ニ差出サスルニ付村吏ニ於テモ原告ノ小作人ナレトモ貢米永ナル故ニ年貢ト記載シ又ハ土地ノ通言ニ隨ヒ誤リタルナリ一体今般論所舊地頭石

來織部上地トナル節自分祖先拂下ケ所有シ原告人共ニ無証ニテ永
小作ニ入置貢租ハ前ニ述ル如クニ取計タルナリ且自分先代名主勤
メタルモアリ勤メサルモアリタルト小作米受取書ハ前條ノ通習慣
ニヨリ年貢ト記載シタルナリ

第四條

原告於テ此事件ノ起發ニ當リ始メテ名寄帳ニ名前ヲキチ知ルト人
申立ナレトモ素ヨリ論地ノ原由ヲ不知シテ該地所有タルト訴フル
大權カテ又延寶ノ度舊地頭石來織部上地ノ際原告人共ニ下ケ渡
シ受ケテ如ル旨申立ツレトモ其原由ヲ不知シテ音三俵貳斗人仕切米
共以テ被告役場ニ依頼シタルトハ前後反對ノ申立ト云々其他村吏
百姓越石ト雖モ眞ノ所有主ナレハ該地ノ帳簿見認メサルナシ村吏
モ見セズト云フナシ百有餘年間ノ久シキニ其主務ヲ盡カシルヤ

小作地ノ最確然タルモノナリ
第五條

三給分列シタルノ知リ得スト云ト雖モ今般原告總代秋葉源右衛門
兼永田村住民富田村今關兵衛ハ右源右衛門弟ニシテ富田村ニ婿
取ルハ其他原告連名ト雖モ舊地頭所替相成節々必ラズ村吏通知
スルナレハ然ルニ數十年間一手ノ神谷組トシ心得居ルハ神谷
虛言ノ甚敷モノナリ

第六條

舊地頭石來織部上地ノ頃ヨリ原告方コテ連綿所有シタル地所ナリ
ハ其中間被告代々論地ノ貢租ヲ勤ムル理ナシ又原告人共論地森分
人米永被告ニ差遣スバ何等ノ儀ナルヤ原告証トスル受取數紙ノ内
五郎左衛門ト記シタル名主五郎左衛門ト記スモアリ自分

所有ニ非サル森分ノ田畑米永名主ヲ勤メスシテ受取ルヘキ理ナシ
 爰ヲ以觀レハ被告ニテ該地所有セルコト明カナリ且國役川役歩料金
 ハ廣場ノ地所永小作致サセ置ニ付原被先代共其年度相對ニテ出サ
 セタルナリ且國役金ハ毎年上納ス可キモノナルニ原告所持スル受
 取証ハ隔年ナレハ右受取証ノミニシテ所有ノ權ヲ有セリトハ疑ナ
 容ルハナリ加スルニ慶應二卯年ヨリ明治五年マテ六ケ年間諸受取
 証一紙モ見サル又疑ヒテ生セリ明治五年ヨリ同八年マテ四ケ年間
 原告人共毫モ貢納セス自分ヨリ上納シタル其証アリ貢納セズシテ
 該地所有ノ權ヲ有ストハ不條理ノ甚シキナリ
 第七條
 寶曆九卯年二月舊政府評定所へ差出シタル濟口証文ナリ一時村方治
 タル爲メ小作ト記セシトハ原告人共其明文ヲ了シ得サルヤ寶曆度

ノ人種今日ノ人種二種ナルヤ否我カ所有地一村ノ爲メトテ猥リニ
 他ノ所有ト記載スルモノ乎記載セサルモノ乎体裁裁迄ノ濟口トハ看
 做シ難シ依テ被告所有タルコト右証文ニテ明カナリ
 第八條
 慶長度檢地以來當今ニ至ル迄地味悉ク變化シ且村高千五百石ノ内
 五百石ハ石來織部給地高四百石ハ大道寺權六郎高六百石ハ舊政府
 代官所ナリシニ内三百九石余伴五兵衛貳百九拾石余ハ小栗熊太郎
 給地ニ分割相成又元祿年中石來織部給地分五百石ノ内高拾八石四
 斗八升壹合舊政府代官所高百七拾七石四斗三升五合ハ河内久五郎
 高百四石八升四合ハ神谷與七郎給地ト相成水帳ト引合セ名寄帳ヲ
 製シ給地毎ニ水帳ニ代ル帳簿ナリ己ニ地頭役印捺シタルモアリテ
 高反別實地持主ヲ正定シ一村人民真正トスルモノナリ

前條ノ如クナルコト付原告ノ請求ニ應シ難シ

判文

第一條

論地字森分田畑合テ六拾三筆此反別壹町四反六畝拾三步ノ内壹町
三反三畝拾九歩ハ原告先代源五郎以下拾六名慶長度繩受ク地
并其他壹反貳畝貳拾四歩ハカチ以下八名同繩受ク地原因不分明ナ
ル由原告先代ノ者共所有地ト相成リタル旨甲第一號ヨリ同第七號
及乙第一號証等ヲ以テ原告申立シテ源五郎以下十六名ハ果
シテ原告先代ナル哉否共証左ナキノミナラス亦カチ以下八名慶長
度繩受ク地ハ地所原告所有ニ歸スル証憑更ニ無之ヨシヤ原告申
立ノ如クナリトナルモ該論地元祿度永田村五百石名寄帳ニハ權右
衛門其後寶永度名寄帳ニハ被告先代五郎左衛門所有地ニ記載有之

故隨テ年貢諸役モ被告方ニテ從來致シ居リ殊ニ原告乙第二十號寶
曆九年卯二月濟口狀ニモ原告先代八名ノ総代人小兵衛外一人ニ於
テ該論地ヲ被告ノ小作地ナリト見認メ居リシ上ハ原告甲第一號ヨ
リ第七號迄ノ証書ハ當時ノ村吏ヨリ請取且年貢云々文字於テ
カチト雖モ右ノ原告方ヨリ被告方ニ請取ルヘキ小作米モ被告方
合テ該論地原告ヨリ直チニ永田村役場ニ納メカセタルモ未ダ見做
サズ得テ仍テ該論地原告所有トハ見認メ難シトシテ人列ニ
非マズ第一條ニ於テ原告方ノ請求ハ不允トシテ被告方ノ請求ハ
前條ノ理由セリ付到底初審裁判所裁判ヲ通り可相心得事
月廿九日
大審院ニ於テ

原告 嘉須里文左衛門外七人代人稻葉克寛上告ノ要領

第一條

東京上等裁判所ノ判文第一條中ニ繩受ノ原因不分明ナレト云々源五郎以下十六名ハ果シテ原告先代ナルヤ其証左ナキノミナラス云々アノト之レ何タル裁判ナリヤ永田郷水帳ハ元來擬製スモノニ非ラス一目ニシテ瞭然タリ最モ積年ノコトニ付亡家之レ有ルト雖モ存在セル者過半ナリ其子孫現在セル源五郎以下ハ土地ノ人民ニシテ田畑邸地迄從前ノ如ク所持セリ又論地内ニハ埋葬墓地等モアリ是等ヲ以テ原告人所有地タル事判然タリ然ルチ水帳ニヨラス繩受ノ原因不分明原告先代ナルヤ其証ナシトノ裁判ハ不法ノ裁判ナリト思考ス

第二條

同判文同條中ニ寶曆九年卯二月濟口証文ニモ原告先代八名ノ總代

今關小兵衛外一人ニ於テ該論地ヲ被告ノ小作地ナリト見認メ居リシ上云々トアノト右濟口証文タルヤ同裁判所へ曾テ上申セシ如ク寶曆九年四月中原被告ヨリ差出シタルニ無相違ト雖モ其文中ハ小作有ルニ當時双方ノ郷宿共取扱ニ立入タルニ右一件數日相懸リヨク入費多分ニ相懸リ難澁不少ニ付扱人ノ意ニマカセ小作御年貢云々四斗入六俵八升并永壹貫七百七文米永共ニ以來市太郎被告先代并諸親類方ヨリ相増候儀不申懸云々ト記載シタル事ニテ事實小作等致シタル儀無之其証トスルハ即今ニ至ル迄右濟口証文ノ如ク亦作米等相納シテ事ナク又延寶度一旦地頭石來織部へ地所取上シ相成シテ直ニ永田村五郷村役人共ニ下ケ渡ナリタル手形アリ加之原告ニ於テ該地被告へ流地ニナシタルコト無ク地所讓渡シタル事モ無キ故被告ニ於テ何年度何等ノ事故アリテ該論地所有スルト

ノ確証無ク又何年度ヨリ原告人共ハ小作為致タルトノ証據無シ唯
舊地頭ヨリ拂下相成リタリト口頭ノ陳述ノミナルヲ採用セラレ右
濟口証文ニ小作トアルヲ以テ其原因ヲモ審問無ク裁判ナリタルハ
不法ノ裁判ナリト思考ス

第三條

同判文同條中ニ原告甲第一號ヨリ第七號マテノ証書ハ當時ノ村吏
ヨリ請取且年貢云々ノ文字アリト云フト雖モ右ハ原告ノ都合ニ
リ直チニ永田村役場ニ納メサセタルモノト見做サハルヲ得ス
以テ慶長以後二百有餘年原告所有地ニテ數世代々ヨリ正々貢租
ノ請取ヲ歷然ト差出シタリ然レモ貢租ト小作米ノ種別アルヲ謂フ
ナク都合ニ寄リ小作米ヲ貢租ト認ムヘキ道理決テ無シ若小作米
ヲハ其小作米ハ永田村役場ニ差廻スル請取ハ地主ヨリ本人共ハ銘

々一人別ニ可差出ハ當然ナルニ其儀會テ之レナシ又貢租ニ非スト
スルモ其取米高ノ相當セサル小作ノ取米ニ非ス抑小作米タルヤ素
ニ惣石盛土地ノ風習ニ依ルハ論ヲ不俟況ヤ貢米ニハ貢米ノ納辻
ニ小作ハ小作米ノ法アリ何斗入ト云ヒ何歩何厘ヲ競フ者ハ郷習
ニヨレハ下田壹反ニ付貢米ハ凡貳斗五六升ナリ小作米ハ凡四斗入
三俵ノ入附ナリ又小作人オレハ永田村ヨリ水帳ノ寫ヲ富田村役人
ニ可相渡ノ理モナシ然ルニ富田村役人ハ之レヲ藏メテ累年取立チ
致シ來リタリ又役米ハ役米ノ法アリテ小作人ノ勤クヘキモノニ非
サルニ數通ノ受取書ニ役米トアリ其上川役國役金トモ原告ニテ差
出來リ是又受取書ニ判然タリ是レ小作人ノ直ニ可納モノニ非ス右
ノ如ク明瞭ナル確證アルニ右等ニ依ラサル裁判ハ不法ナリト思考
ス

第四條

同判文第三條ニ到底初審裁判之通可相心得トアレト初審千葉裁判所ノ裁判タルヤ真正ノ水帳ヲ棄テ、改造シタル名寄帳ヲ信セラレ永田村里正賄高ナル者ヲ名寄帳ニ依リ被告齋藤五郎作所有ニ歸シタル下リ裁判ナシトシテ初審裁判ノ通可相心得トノ裁判ハ不條理ヲ裁判ト思考ス

前條ノ次第ニ付東京上等裁判所ノ裁判ヲ破毀アラシトシテ乞フ人ニ上告ノ主點ハ左ノ條件ナリトス

第一 永田郷水帳ハ擬製ニ非ラス亡家有リト雖モ源五郎以下其子孫現在スルニ繩受ノ原因不分明原告先代ナルヤ其証ナシトノ裁判ハ不法ナリトシテ事(第一條第四條)

第二 寶曆度濟口証文ハ郷宿共ノ取扱ニ爲任小作御年貢ト記載シ

辨明

第一條

タレトモ事實小作コアラヌ又延寶度一旦地頭へ取上直チニ永田村五郷村役人へ下渡シタル手形アリ又流地讓渡等ニシタルナク云々地頭ヨリ拂下相成タリトノ口頭ノ陳述ヲ信用セズ其源因ヲ審問無ク裁判アリシハ不法ナリトノ事(第二條)

第三 慶長以來貢租請取ヲ出シタルニ都合ニ寄リ云々小作米ナルハ永田村役場へ差廻スモ請取ハ地主ヨリ各別ニ可差出ハ當然ナリ又貢租ニ非ラストスルモ其取高相當セズ又小作人ナレバ永田村ヨリ水帳ノ寫ヲ富田村役人へ可渡理ナシ又役米ハ役米ノ法アリ小作人ノ可納モノニ非ラス右ノ如ク確証アルモ右確証ニ因テサルハ不法ナリトノ事(第三條)

上告要旨第一條中ニ永田郷水帳ハ元來擬製ノモノニ非ラス云々然ルヲ水帳ヨラス繩受ノ原因不分明原告先代ナルヤ其証ナシトノ裁判ハ不法ヲ云フ雖モ水帳繩受ノ當時慶長度ニ在リテハ水帳ノ名前ハ所有主ナル確証ナルモ水帳繩受モ當時ヨリ後至地所ハ所有ハ變換シ時ハ其變換シ証ナシハ公正ナル寄帳ニ依ルヘキハ當然ナルニシテ永田郷於テ慶長度ヨリ以後積年久シキモ家過半ニ至ルモ其水帳ノ名前ハ依然トシテ變換シ其地主ハ幾變換ヲ知ルヘカラス故ニ慶長以後ニ於テ公正ナル各寄帳ノ以上ハ源五郎以下原告ノ先代ナルヤ否其原因ヲ知ルニ由ナクハ上等裁判所ハ繩受人源因不分明原告先代ヲ認セ其証ナシト判決シ相當ノ裁判ナラズ

第三條

上告要旨第二條中ニ右濟口証文タルヤ云々寶曆九年四月中原被告ヨリ差出シタルニ無相違ト雖モ其文中ニ小作ト有ルハ當時双方ノ郷宿共取扱ニ立入タルニ右一條數目相懸リテハ入費多分ニ相懸リ難減不少ト付扱人本意ニ爲任小作御年貢云々即今ニ至ル迄右濟口証文ノ如ク小作米等相納タル事ナシトアルニ因リ審案スルニ入費多分ニ相懸ル地中自分所有地ノ權利ヲ拋棄シテ他人ノ所有地トナシ小作スルノ道理ナシトス又延寶度一旦地頭石來織部へ地所取上相成タリト直チニ永田村五郷村役人共へ下ケ渡ナリタル云々該地被告へ流地ニナシタル地所讓渡シタル事無キ故被告ニ於テ何年度何等ノ事故アリテ該論地所有ズルトノ確証ナシト云フト雖モ地頭石來織部ヨリ永田村五郷村役人共へ下ケ渡タル手形アルモ上告人共へ下ケ渡タルトノ手形無キ以上ハ上告人共ノ所有ト爲セ

シ証ナシトス

又何年度ヨリ上告人共へ小作爲致タリトノ証據無シ云々唯右濟口証文ニ小作トアルヲ以テ其原因ヲモ審問無シ裁判ナリタルハ不法ナリト申立レトモ上告人共ニ於テ寶曆度濟口証書へ小作云々ト記載セシ以上ハ小作地ニ非ラストノ申立ハ相立ストス

第三條

上告要旨第三條中ニ小作米ヲ貢租ト可認道理ハ決シテ無之ト云フト雖モ小作トハ人ノ田畑ヲ借リ耕耘スルヲ云フ其田畑ニツイテ稅ヲ地主ニ収メルヲ小作年貢ト云フハ從來ノ慣習ナレバ小作米ヲ貢租ト唱ヘシトテ小作米ニアラスト云フ實得ス又小作米ヲラハ其小作米ハ永田村役場へ差廻スモ請取ハ地主ヨリ本人共へハ銘々一人別可差出ハ當然ナリト云フモ寶曆九年濟口証

書中ニ八人ノ者久敷小作致シ候儀ニ相違無之云々米四斗入六俵餘ノ内貳俵餘ハ御年貢三俵餘ハ諸役并作徳ノ旨御請証文へ御記載被下トアルヲ視レバ小作ナルハ論ヲ俟ス左スレハ一人別請取書ナシトテ小作ニアラストノ申立ハ相立ストス

又貢租ニ非ラストスルモ其取米高相當セサレハ小作ノ取米ニ非ラスト云フト雖モ土地ノ厚薄ト地主ノ處分ニ依リ取米ニ高下ナシト確定スルヲ得ス其取米ノ相當スルトセサルハ地主ノ權内ニアルモノナレハ上告人ニ於テ相當セサルト思考セリトテ論地ハ被告ノ所有ニアラストノ証ニハ相立ストス

又川役國役金トモ原告ニテ差出云々小作人ノ直チニ可納モノニ非ラスト云フモ國役金ハ連年上納スヘキモノナルニ原告提供スル國役金ノ受取ハ隔年ノ納メノ証ナレハ被告申立ノ通り原被告先代共

慈愛相對ヲ以テ一時原告先代ヨリ取替納タルモノト認定セサルヲ得ス如何トナレハ國役金等ハ連年納サルヲ得サルモノナルニ享保ノ後原告ニテ納タル証ナケレハナリ
右條々ニ辨明セシ如ク原裁判所ノ裁判ニ於テハ不法ト爲スヘキ條件ナシトス

判決

右ノ如クナルヲ以東京上等裁判所カ明治十年十一月廿九日言渡シタル裁判ヲ破毀スヘキ理由ナシトス

第八號

○作德米未納催促一件裁判申渡 明治十一年七月八日上告

原告 新瀉縣下越後國蒲原郡

十二道島村平民

西村嘉平

被告 新瀉縣下越後國蒲原郡

湯川村平民小畑六三郎

代理人 牛平 清吉

引合人 新瀉縣下越後國蒲原郡

十二道島村平民佐藤與

三郎代人同人俸

佐藤祐一郎

大審院ニ於テ

原告 西村嘉平供述ノ要領

十二道島村櫛下村兩村ニ於テ被告小畑六三郎所持田畑小作支配

ヲ托セテ小作入付米ノ内ヨリ貢租諸掛リ等一切引去リ地主徳米
 ノミ六三郎方へ差贈リ來リシ處去ル明治八年ニ至リ小作米淹滞セ
 シ旨ヲ以六三郎ヨリ新潟裁判所へ出訴ニ及ヒ其結局米八拾壹石六
 斗六升壹合九勺自分ヨリ六三郎へ辨償スヘキ旨裁判云渡ヲ受ケタ
 レトモ原告嘉平ニ於テ不承服ノ條件存之ニヨリ明治九年五月十五
 日東京上等裁判所ニ控訴セシ處明治九年十月二日ノ裁判ニテ米七
 拾壹石四斗四合三勺嘉平ヨリ六三郎へ辨償スヘキ旨云渡サレタリ
 左レトモ右裁判不法ノ廉アリト思考シ明治九年十一月三十日當大
 審院へ上告ニ及ヒ追々審問ノ末明治十一年六月一日原裁判ヲ破毀
 セラレ更ニ六三郎及ヒ引合人與三郎共召喚ノ上當大審院ニ於テ判
 決アルヘキ旨云渡ヲ受ケタリ爾後六三郎與三郎ヲ召喚アリタル趣
 ノ處六三郎ハ中風症與三郎ハ健忘症ニテ出頭不相叶依テ六三郎ハ

初審以來代人タリシ牛鷹清吉ヲ差出シ與三郎モ亦初審以來代人タ
 リシ俸祐一郎ヲ差出シ原被引合人共對審ヲ受ケタル末從來粉議居
 合公サリシ明治二己年ヨリ明治七成年迄六ヶ年間ノ計算書ヲ可差
 出旨命令ヲ受ケ即進呈スル處ニ計算書別紙ノ通りニ有之右計算ニ
 對シ原被差違アル廉々左ニ陳述スヘシ

第一條

櫛下村貢米高被告ハ嘉平ヨリ差入レタル質流地証文ニ記載セシ高
 ニ基キ壹石六斗六升八合七勺ヲ以計算スレトモ右ハ往古ノ貢米高
 ニシテ質流地ノ年度以前ヨリ壹石八斗貳升三合六勺トナレシ依テ
 質流地証文ニ現場ノ貢米高ヲ記スヘキヲ誤テ往古ノ高ヲ記シタル
 モノナリ然レトモ實際貢米高ハ原告計算ノ通リ壹石八斗貳升三合
 六勺ニ有之其証據ヲ得ン爲メ今般俸嘉七郎ヲ以櫛下村戸長へ掛合

明治十一年十月三十日

西村嘉一郎印

共立五上縣農務局第三道島村也

西村嘉一郎印
二十一年十一月十七日ヨリ改印

右書面第二項ノ脇書ニ壹斗八合明治五年壬申十月廿日西村嘉平友
 へ引直改メ石正アルニ依テ是迄原告ヨリ申上候増米ノ高ニ相應
 セス且年度西明治五年ニ以テ増米相見不都合ニ有之察スルニ嘉一
 郎ハ被告小畑六三郎上駟合右様曖昧ノ義ヲ申立候一ナルヘシ然レ
 トモ舊戸長ニ於テ右様申立候上ハ是非ニ不及是迄差上候計算書モ
 五年分其以壹斗八合以増米ニ改メ申候此計算ニ由リ候テモ被告六
 三郎代人其以差上候計算書ニ以テ五年分ヨリ七年迄三年ノ間壹
 斗八合以テ差違生シ申候依テ改正計算書ニ由リ差引也

請ス

但貢米受取書ハ一通所持罷在候處遺失致シ候
 第二條
 口米給米高被告計算ノ方嘉平計算高ヨリ貳升ヲ増加スルハ全ク自
 分ノ違算ナルニキニ付被告計算ノ通りニテ異論無之
 第三條

足役米ハ貢米壹石ニ六斗五升ヲ掛タルモノ故ニ櫛平村貢米ニ原被
 差違アルハ同村足役米ニ差違ヲ生スヘキ筈ニ有之此件ハ第二條
 貢米ニ準テ計算ヲ爲スナリ當然ト思考ス
 第四條
 惡作引ノ高ハ毎年六三郎ト協議濟ノ上各小作人へ免除ヲ與ヘタル
 モノニ有之今日其証據未ダ有セスト雖モ現ニ小作人へ免除ヲ與ヘタ

此ニ相違ナキヲ以令更之ヲ取立ル事ハ爲スヲ得ル義無有之候
 計目ノ第五條第六三項ノ旨ニ依テ右ノ如ク申立テ
 米直段并ニ廻米ノ件ニ付被告ハ明治九年八月二十一日ノ熟談書
 其基キ計算者旨申立ト雖モ右熟談書ハ自分存意ニ適セサルニ付
 取消シ度旨東京上等裁判所ニ願書差出シタルニ書式不都合旨未
 以採用ニ不相成爾來其儘ニ相成ヌリト雖モ今日ニ於テモ不承諾
 有之候
 依テ自分計算書ノ通差引スルキ様裁判アラシク申請
 日本銀行第六條目ノ旨ニ依テ右ノ如ク申立テ
 金百圓金百八拾圓金四拾圓合計金三百貳拾圓ハ小作米代トシテ六
 三郎代與右衛門へ渡シ其受取書ヲ所持セ即左ノ如シ
 第一號

覺

一金百兩也

但德米代金

右ノ通差無受取申處相違無御座候以上

六右衛門代

明治三年月

與右衛門印

嘉兵衛殿

第四號

一金百八拾兩也

但德米代金

右ノ通差無受取候處相違無御座候如件

六右衛門代

明治四年二月二十一日

與右衛門印

第八號

覺

嘉兵衛殿

一金四拾兩也

但德米代金

右ノ通牒ニ受取申處相違無御座候以上

六右衛門代

明治五申三月

與右衛門印

嘉兵衛殿

右三通共確實ノ証書ナルヲ以テ縱令六三郎ハ與三郎ヨリ未タ落手
セストモ原告〔嘉平〕ハ對シ請求スルヲ得サルモノニ有之候其譯ハ六
三郎止與三郎トハ從兄弟ノ間柄ニテ特ニ右三口ノ金子ノミナラス
六三郎ニ代リ小作米取引セシ例ハ度々有之然ルヲ與三郎ナル者六

三郎ノ督責ヲ免レン爲メ印形相違ノ旨曾テ新潟裁判所ニ於テ申立
同人俸祐一郎モ亦終始與三郎同様主張スト雖モ都テ不正ノ申分ナ
リ 一六三郎代人牛腸清吉ニ於テハ明治八年十二月十日付ヲ以テ新潟
裁判所へ差出シタル清吉以下四人爪印ヲ押捺シタル書付ヲ以三通
ノ受取書ヲ取消サントスレトモ右書付ノ出來セシ手續ハ退々申立
タル如ク強迫ニ成立チタルモノ故無効ノ書ナリ
右三通ノ受取書ノ條件ニ付初審以來上告ニ至ル迄退々上申シタル
通り確實ノ証書ナルヲ以テ差引スヘキハ當然ト思考ス

第七條

皆朱膳椀ノ條件モ前條三通ノ受取書ト同様ノ事理ニ付小作米ト差
引スヘキハ當然ト思考ス即皆朱膳椀預リ証書左ノ如シ

第九號分

記

一皆朱膳梳

二十人前

但己ノ膳湯桶辨當付

此代金三拾兩ニ圖

右去未身作德米并貸米代金高ノ處

如件

湯川村

小畑六三郎代

明治五年壬申年十二月

與三郎印

第八條

三通ノ受取書及七膳梳預リ証書共明治十年一月十四日遺失セシニ
付其旨御届申上置タル處今以所在不相分然レトモ初審終審共裁判
官ノ檢閱受取書以後所ルニヨリ今日本紙ヲ所持セストモ差支
トナル事筋ハアルマシク依テ都合四通ノ受取証書ニ付テハ初審
以來進歩上申タル廉々參酌ノ上結局五拾四石八斗三升四合七夕
ノ過渡米被告六三郎ヨリ自分へ償却スヘキ様裁判アラソトテ希望
ス

但訴訟入費規則ヲ通被告ヨリ辨償受度候事

被告小畑六三郎代人牛腸清吉供述ノ要領

被害小畑六三郎儀ハ原告西村嘉平持地ノ内

十世道嶋村

田坊千五百

貢米貳石五斗

此入付米貳拾貳石五斗

田方三反步

貢米三石

此入付米廿四石七斗五升

此流質地代金六百兩

畑方壹町貳反步

貢米壹石八斗

此入付米九石

此流質地代金三百兩

田方八反三拾八步

貢米壹石六斗六升八合七勺

此入付米拾石九斗四升四合四勺

此流質地代金貳百兩

右ノ地ハ文久三戌年ヨリ六三郎方へ質地ニ取置タル處明治三己

十二月質流地ニ相成候事

右地所質入中ヨリ嘉平ニ小作并ニ小作人支配致サセ置タル處連年

水作米淹滞セテ空付嘉平外十三人ノ小作人へ係リ新潟裁判所へ小

作米請求ノ訴訟ニ及ビシ處小作人矢部彌平治其外十一人ハ年々嘉

平へ相渡シ未納ハ一切無之旨申立嘉平ニ於テモ矢部彌平治等ヨリ

ハ受取タルニ付精算可致旨ヲ以テ明治二己年ヨリ明治七戌年迄六

个年分ノ作徳米仕譯ク書テ明治八年十一月四日付ヲ以テ新潟裁判所

へ差出シタリ

爾後遺々審問ノ上結局米八拾壹石六斗壹升壹合七勺嘉平ヨリ六三郎ニ辨償スル旨裁判アリタルヲ嘉平不服テ唱へ明治元年五月申東京上等裁判所ニ控訴致シ最前始審ニ節嘉平カ偽作ニ受取書等ヲ以請求セシ四百三拾壹圓ノ廉ハ不申上シテ更ニ六右衛門代與右衛門ニ渡シタル米ノ三百廿圓ノ受取書并ニ始審ニ差出サ、コシ騰椀預リ書等ヲ以淹滞米ト差引セシメテ主帳ニ添リテ以テ嘉平ノ申分不相立結局七拾壹石四斗四合三勺嘉平ヨリ六三郎ニ辨償可致旨終審ニ裁判ニ渡ルルヲ嘉平ニ於テ不法ノ裁判ナリトシ明治九年十一月申上告ニ及ヒシ處明治十一年六月二日原裁判ヲ破毀セラレ更ニ原被及ヒ引合人等對審ノ未結局明治二己年ヨリ明治七戌年迄六介年間ノ計算書可差出旨ノ命令ニ應シ差出シタル處ノ計算書ニ對シ双方ノ計算差違アル廉ニ弁解スルヲ左ノ如シ

第一條

原告西村嘉平ニ櫛下村貢米高從前壹石八斗貳升三合六勺ノ處明治二己年三月中被告小畑六三郎ニ質流地ノ節誤テ証文面ニ貢米壹石六斗六升八合七勺ト記載セシ付現場ノ貢米ニ引直度共証據ヲ得テ爲メ節嘉七郎ヲ以テ櫛下村戶長ニ掛合ハシテ之ノ處戶長井曠ニ死去當今ノ戶長大橋重次郎ニテハ不分付舊戶長西村嘉三郎ノ取調書ニ差越テ此取調書モ不都合ナレハ舊戶長於テ右様申立候上ハ是非ニ不及明治五年分ヨリ七年迄三介年間壹斗八合ニシテ差違生シタルニ依テ改正計算書ニ依テ差引セシメテ乞フ旨申立候雖モ決テ承諾致シカタク何トナレハ嘉平ニ於テ新瀉裁判所審理以來明治二己年以前ヨリ櫛下村ノ貢米ハ壹石八斗貳升三合六勺ニテ申立置タルニテ然ルニ今又嘉平カ進呈スル處ノ舊戶

長西村嘉三郎カ取調書ヲ見ルニ其第三項ニ貢米壹斗八合是ハ明治
 五壬申年地券發行ニ付字頭無シ田方西村嘉平持地ノ内北村亡祐吉
 存命ノ節西村嘉平ハ讓渡候貢米明治五申年十二月ヨリ西村嘉平ハ
 引直改石トアリテ被告小畑六三郎カ嘉平ヨリ質流地ニ引受タル地
 所ナリ云フハ毫モ無之左スレバ右壹斗八合ハ嘉平カ引請タル
 貢米ニシテ六三郎ニ關係ナキコト判然タルヘシ依テ本訴ノ差引中ハ
 算入スルキモ非ニ加之櫛下村貢米明治五年十月以前ハ壹石七
 斗壹升五合六勺ニ有之テハ嘉平ハ何レ由テ明治二己年以前ヨリ壹
 石八斗貳升三合六勺ナリト初審以來主張タルモ甚ク不當ナリ
 又今般嘉平ヨリ進呈タル舊戸長西村嘉三郎カ貢米取調書ニ對シ
 テハ疑團ナキ能ハス其譯ニ先般嘉平ヨリ櫛下村戸長ハ掛合方申遣
 シ候節被告ヨリモ當戸長大橋重治郎ハ掛合ニ及ヒタル往復書左ノ

通

願主候事合ノ爲メ人等對ニ申對當部候爲メハ
 新潟縣第廿九太區小工區才二道島村西村嘉平ヨリ貢米高左ノ通
 申立ル
 大橋重治郎

一 壹石八斗貳升三合六勺

櫛下村小須戸入銀共

同縣第十八太區小伍區湯川村六三郎代人牛腸清吉ハ貢米高左ノ

通申立ル

櫛下村小須戸入銀共

一 壹石六斗六升八合七勺

櫛下村小須戸入銀分共

戸長役場ノ割印

右ノ通双方申立候處本切實米計壹斗五升四合九勺ノ行違
 有之候付足役口米給米共行違ヒテ生シ候始末御審問相成
 大審院ヨリ櫛下村分ノ地所元誰ヨリ誰ニ讓渡シタル六三郎讓

第二條

嘉平ニ於テ口米給米ノ儀ハ算違ノ趣先非テ發明スル上六別ニ弁駁
 大用ヒズ、
 第三條
 足役米ハ貢米壹石ニ付六斗五升ヲ掛クモ力ニ付第一條貢米ニ依
 テ計算スルヲ當然ト思考ス
 第四條
 原告嘉平ニ於テ惡作引ノ儀ハ毎年六三郎ト協議濟ノ上各小作人ニ
 免除ヲ與ヘタル云々何ニ依テ如此申立ルヲ免除ヲ與フルト與ヘサ
 ルトハ地主六三郎ノ權内ニアリ凶年ノ年柄ハ小作水入証文面ノ通
 リ取立候モ惘然ニ付幾分ノ免除與ヘ然ルハ畢竟六三郎ノ憐愍ニ
 出タルモノニテ支配人タル嘉平カ取捨スヘキ筋ニ非ス抑モ支配人

第五條

ナ立置ハ遠隔地ニ田畑ヲ所持スルカ故ニ村役場ノ貢租諸役銀ヲ爲
 取次又ハ小作人共ノ未納米有之時ハ地主ニ納方督促等ニ使役スル
 カ爲メニシテ其大儀料ヲ與ヘ置タルモノナリ然レ前條ノ如ク六三
 郎ト協議濟ノ上各小作人ニ免除云々ハ以テ外ノ事ニテ六三郎ハ
 計算書ニ記載シタル外一粒モ免除致シタル儀ニハ無之即小作人ノ
 内矢部彌平治外十名ニ於テハ六三郎申分ノ通り聊差違無之旨己
 ニ新潟裁判所ニ申立置タル處獨リ嘉平ノ此儀ヲ主張スルハ甚ク
 不當ナリ依テ被告精算仕譯書ハ通裁判アランヲ請フ
 第五條
 米直段并ニ廻シ米ノ儀ハ明治九年八月二十一日付ヲ以テ左ノ熟該
 書カ

一私共一併御取調中本月十九日明治三年五月付金五拾圓同年七月付金廿圓同四年七月付金拾圓同年八月付金拾圓合金九拾圓原告ノ申立タル米價相違モ有之候ニ付右ハ都テ四斗貳升入五俵ノ直段ニテ熟談書差上候得共十二道鳥村ハ入付米壹石ニ付貳斗ノ廻シ米相掛候儀ハ仕來付右四斗貳升入ハ入付米三斗五升ニテノ廻シ米相掛ケ候ハ四斗貳升ニ相成候ニ付今般シ仕譯書ハ都テ入付本米ノ仕譯ニ付廻シ米ハ總ニ結末ニ記載計精算可仕事ニ熟談仕候處相違無御座候

明治九年八月廿二日 牛島 勝 清 吉印
 西村 嘉平 印
 東京上等裁判所 伴六等判事殿

東京上等裁判所へ進呈仕置候得ハ右熟談書ノ通り計算アラソクテ請フ

第六條

原告嘉平ニ於テ三口金三百廿圓ハ小作徳米代金トシテ六三郎代與右衙門へ渡シタル受取書有之ニ付縱令六三郎ハ與右衙門事與三郎ヨリ未タ落手セストモ自分へ對シ請求スルヲ得サルモノ有之云々申立候得共右ノ金員ハ初審以來六三郎ハ勿論與三郎并ニ代人祐二郎ニ於テモ受取タル事無之素ヨリ受取書ヲ渡シタルモ曾テ無之其筆跡印影モ相違セル趣申立置タル然ルニ原告ニ於テ無際限此義ヲ主張スルハ甚タ不當ナリ殊ニ嘉平カ新瀛裁判所へ差出シタル明治八年十一月四日付ノ仕譯書ハ右ノ三百貳拾圓ハ毫モ記載不致察スルニ引合人ノ佐藤與三郎中風症ニテ言語不自由ノ慮付ケ

又本訴請就前入証書十通遺失を以て趣申立候事故意ニ出タルモ
本訴請恐方為三時宜計係別差出カモ計難シ目内候事請合テ百圓
存分始末等依三時宜三百貳拾圓ノ金額未納米差引中へ算入
可致證以毫モ無之依テ被告計算ノ通辨償セシメテ請合テ
第七條

皆未騰椀預リ書ハ儀ハ初審裁判所へ更ニ差出サテ此預リ書モ三百
貳拾圓ノ受取書ト同様六三郎ニ於テハ有物品ヲ受取嘉平へ貸米等
致候儀ハ曾テ無之又佐藤與三郎へ代人相頼候事モ無之
第八條

三通ノ受取書及ヒ騰椀預リ書共明治十一年二月十四日遺失ト稱シ
タレモ初審以來裁判官ノ檢閲ヲ受ケタル云々申立候得共騰椀預

リ一札ハ初審裁判所へハ一向不差出候間檢閱即ハ決テ無之候又三
通ノ受取書ナルモノハ第六條ニ陳述シタル始末ニ付仮令今日存在
スルニモセヨ作徳米ノ差引ニ立ツヘキモノニアラズ
第九條

原告嘉平ヨリ差出シタル作徳米計算書ヲ見ルニ明治三午年分ハ六
三郎へ五拾石三斗三升貳合七勺貸高ト有之又明治四未年分ヲ見ル
ニ金貳拾圓明治三午年十月小須戸町矢部熊吉へ米手付金渡ス金百
八拾圓明治四未年二月六三郎代人佐藤與三郎へ渡ス此代米三拾五
石直段拾圓ニ付四斗貳升入五俵ト有之此分ハ仮リニ原告ノ仕譯ニ
ヨルモ明治三午年ノ作徳米ノ仕譯ノ部へ編入可致筭ナリ若シ之レ
ヲ編入致ス時ハ明治三年分ハ合セテ八拾五石三斗三升貳合七勺ノ
過米ト相成ルナリ然ルニ嘉平ハ此餘六三郎ヨリ借金三口ハ七百八

拾圓モ不相濟殊ニ同區内田上村松尾松右衛門ヨリノ負債ノ爲ノ明治三年年中一旦身代限リノ處分ヲ請タル身分ニシテ何ソ如斯莫大ナル過米代金ヲ相渡スヘキ理由アラシキヤ是等ヲ以テモ三口ベ三百貳拾圓ハ謀書謀印ニシテ授受セサルコト明瞭タルヘシ

第十條

原告嘉平計算書ニ借高六今年分合計廿貳石六斗貳升九合三勺外ニ拾四石三斗五升明治四年二月六三郎代與三郎ヨリ四斗貳升入四十一俵受取ルト有之候得共右拾四石三斗五升ノ四十一俵ハ六三郎ヨリ與三郎へ代人ヲ頼ミ嘉平へ相渡シタルコトハ更ニ無之然ルニ今般始テ右様ノ儀ヲ申立ル者ナレハ後日猶又難題ヲ申掛ルモ計リ難シト掛念ス

第十一條

原告嘉平ヨリ差出シタル舊戸長西村嘉一郎ノ貢租取調書ノ印形不審ニ付櫛下村戸長大橋重次郎へ掛合嘉一郎ノ印鑑ヲ取寄セ嘉平カ提供セシ嘉一郎捺印ノ書面ニ照合スルニ印形相違シ不正ノ書面ニ付右ニ不拘仕譯書ノ通り裁判アラシキコトヲ請フ

但訴訟入費ハ規則ノ通り原告ヨリ辨償受度候事

引合人

佐藤與三郎代人佐藤祐一郎供述ノ要領

西村嘉平作德米未納一件ニ付小畑六三郎ヨリ初審ノ裁判ヲ仰キシ末嘉平東京上等裁判所へ控訴致シ爲引合父佐藤與三郎召喚サレシ節代人ニ罷出總テ供述セシ通りニテ嘉平ヨリ六三郎へ渡スヘキ作德米滞高へ對シ三口合金三百貳拾圓受取シ儀ハ曾テ無之且皆朱贖椀ハ貸米ノ引當テニ取リ置タル儀ニシテ此分ハ父與三郎ト嘉平トノ取引ナル故六三郎ニハ關係無之尤贖椀ノ受取書ハ渡シ置タルト

モ其受取書ニ印形ハ無之又六三郎代ト記シタルヲモ無之然ルニ過般嘉平ヨリ東京上等裁判所へ差出シタル受取書ニハ印形モアリ又六三郎代トアルハ全ク父與三郎ヨリ渡シ置キタルモノナリ相違セ

本訴ノ要點ハ左ノ條件ナリトス

- 第一 櫛下村貢米ノ高ニ差違アリトノ事
- 第二 十二道幅村櫛下村阿村口米給米ニ差違アリトノ事
- 第三 櫛下村足役米ニ差違アリトノ事
- 第四 惡作引ニ差違アリトノ事
- 第五 米直段及ヒ廻シ米ニ差違アリトノ事
- 第六 金百圓金百八拾圓金四拾圓受取書三通ノ事
- 第七 皆朱膽椀預リ書ノ事

第八 訴訟入費ノ事

判決

第一條

櫛下村貢米ノ件ニ對シ原告西村嘉平ハ櫛下村舊戸長西村嘉一郎ハ書面ニ壹斗八合(但書)是レハ明治五壬申年地券御發行ニ付字頭無シ田方西村嘉平持地ノ内北村亡祐吉存命ノ節西村嘉平へ讓渡候貢米明治五年十月ヨリ西村嘉平方へ引直改石トアルニヨリ明治五年ヨリ壹斗八合ノ増貢納ニナリタル証ナリト云ト雖モ右書面ノ意ハ明治五年ヨリ西村嘉平方ニ引直スルノ主意ニシテ從前何程ノ貢米ナリシカ何程増加セシトノ主意ニ非ズ且被告六三郎代人ヨリ差出ス所ノ當今ノ戸長大橋重次郎ノ調書ハ西村嘉一郎ノ調書ニ相違セリトス右嘉一郎ハ其以前戸長ニテアリシト雖モ己テ退役シタル上

ノ調書ハ村役場ノ調書ニ非スモテ嘉一郎一己ノ調書ナリトス若シ
 當今戸長ノ調書ハ事實ニ相違セシ証據アラハ格別ナリト雖モ左
 ナシヨテ嘉一郎ノ調書ヲ以テ當今ノ戸長即村役場ノ調書ヲ取消ス
 得得ルモシヨテ依テ貢米ノ儀ハ嘉平ヨリ差入シ置タル質流地証
 書並記載ノ通計算可致事
 附第五條 第三條
 印米給米ノ件付テハ源被双方共異論ナシト適宜ノ計算ヲ爲ス
 附第六條 第三條
 足役米ハ貢米高ヨリ算出スル方法ナル旨原被双方ノ申立一致スル
 上ハ第一條貢米高ノ割合ヲ以テ計算可致事

第四條

惡作引ノ件ニ付原告嘉平ハ其年度毎ニ地主六三郎ニ協議ヲ遂ケ免
 除ヲ得タル旨申立ト雖モ協議セシ証據ヲモ出サズ被告六三郎代人
 ニ於テ惡作引ノ義ハ計算書ニ記載セシノ外曾テ免除シタル事之ノ
 ナキ旨申立ル上ハ計算書ニ記載外ノ免除ヲ求ムルヲ得サル事

第五條

米直段及ヒ廻シ米ノ件ニ付被告六三郎代人ハ明治九年八月二十一
 日付熟談書ノ通計算スヘキ旨申立原告嘉平ハ東京上等裁判所ニ右
 熟談書取消ノ願書ヲ差出シタルニ書式不都合ノ旨ニテ採用ニ不相
 成爾來其儘ニ相成タル旨申立タリ然ルニ双方調印シテ差出シタル
 熟談書ヲ一方ノ願ニヨリ取消ヲ許可スヘキ理由ナク即取消ニナラ
 サル上ハ熟談書ノ旨ニ從ハサルヘカラス而シテ右熟談書ニ都テ四
 斗貳升入五俵ノ直段トアルノミニテ代金何程ニ付四斗貳升入五俵

ナカ分味ナラズ然ルニ東京上等裁判所ニ於テ明治九年八月十九日原被双方ヨリ左方申立アリ
 西村嘉平牛腸清吉申上候原告(西村)ヨリ被告(小畑代人)ニ相渡シテ
 小畑作米代金明治三年五月中五拾圓同年十月中貳拾圓明治四年
 七月拾圓同年八月拾圓合計九拾圓ハ是迄双方ヨリ差上置候佳譯
 書右九拾圓ニ米ニ仕切リタル相場ハ相違致居候得共今般熟談ノ
 上金拾圓ニ付玄米四斗貳升入五俵ノ相場ト相決シ申候
 右ノ通和違無之候

西村嘉平 牛腸清吉 印
 右ノ通和違無之候

熟談書及ヒ明治九年八月十九日ノ申立ニ基キ計算可致事

第六條

三口合計金三百貳拾圓六右衛門代與右衛門ト記シタル受取書三通
 八件ニ付原告嘉平ハ被告六三郎(舊名六右衛門)代人與三郎(舊名與右
 衛門)ハ入金ニシテ相違ナキ旨主張シ被告六三郎代人及ヒ引合人與
 三郎(舊名與右衛門)於テハ偽造ノ受取書ナル旨主張セリ又新瀉裁判所
 ニ於テ六三郎與三郎ノ申立左ノ如シ
 私ニシテ西村嘉平ニ相係リ候事件御調中右嘉平ヨリ明治二己年百
 圓同四年百八拾圓同五年四拾圓ハ三百貳拾圓六三郎代與三
 郎ト有之受取書三枚差出候得共私十二道嶋村抱持ノ内與三郎嘉
 平兩人ニ小作爲致置候得共右三枚ノ受取書ノ金員ハ與三郎ニ代
 人ニシテ爲受取候義一切無之候ニ付與三郎ヨリ私受取候義無御座
 候尤嘉平ニモ右與三郎ニ相渡候様申談置候義無之然ル上ハ前受

取書ノ次第ニ於テハ嘉平與三郎ノ間ニテノ取引ニテ私義一切關係無之ニ付速ニ嘉平ヨリ未納和濟候様奉願上候

明治九年一月二十九日 小畑六三郎印

第十八大區小五區湯川村小畑六三郎ヨリ當村西村嘉平へ相係ル未納米事件御調中嘉平ヨリ明治己年百圓同四未年百八拾圓同五申年四拾圓ハ三枚ニテ三百貳拾圓也六三郎代與三郎ト有之受取書差出候ニ付屢對決被仰付候得共右金員ノ義ハ西村嘉平ヨリ受取候義一切無之候へハ六三郎へ相渡候義無御座候間此上ハ右受取書ノ真偽嚴重御調被成下度此段奉願上候

明治九年一月二十九日 佐藤與三郎印

如此相争フ上ハ右受取書ノ真贋ヲ鑑定セサレハ受取書ノ効ノ有無ハ決スヘカラサルモノトス然ルニ嘉平ハ右受取書ヲ明治十一年一

月十四日遺失シ今ニ所在知レサル旨申立ル上ハ之レカ鑑定ヲ爲スニ由テ依テ三百貳拾圓ノ金額ハ小作滞リ米ノ差引ニハ相立サル事ニ付第七條ニ依テ其ノ金員ハ六三郎ヨリ借リ受ケタル米代金ノ

膳椀預リ書ノ件ニ付原告嘉平ハ六三郎ヨリ借リ受ケタル米代金ノ引當トシテ金三拾圓積リテ以テ預ケ置六三郎代與三郎ノ預リ書ヲ取置タル旨主張シ六三郎代人ハ右品物受取嘉平へ貸米等致候儀ハ無之旨申立ト雖モ明治九年八月十九日東京上等裁判所ニ於テ六三郎代人牛腸清吉與三郎伴祐一郎ハ口供左ノ如シ

明治九年八月十九日口供 牛腸清吉并引合人佐藤與三郎代人佐藤祐一郎申上候右原告ニテ申上ル皆朱膳椀ノ証書ノ儀ハ真正ノモノニ御座候則証書文面ハ

通嘉平ヨリ六三郎へ可差入明治四年ノ作徳米滞并同年中嘉平へ
 六三郎ヨリ貸シ付ケタル米五石九斗ノ爲引當受取置候膳椀ニ有
 之依テ作徳米貸米トモ皆濟致候ハ、何時ニテモ差返可申候決テ
 原告ノ申立如ク作徳滞リ高へ代金三拾兩トシ受取切ニイタシ
 然ルモハハ無之候
 右相違不申上候以上
 牛 膳 清 吉印
 佐藤祐一郎印
 右ノ通ニ有之上ハ原被双方立會ノ上皆朱膳椀ヲ賣拂ヒ其代金ヲ以
 過不足計算ヲ爲スカ又ハ嘉平ヨリ金額ヲ拂入レ膳椀ヲ取戻スカ原
 被双方ノ協議次第タルヘシ
 第十條 第八條

訴訟入費ハ原告西村嘉平ヨリ辨償スヘキ事

第九號

○復往差拒一件上告ノ判文明治十一年九月十九日上告

原告

群馬縣下上野國群馬郡

北原村六番地平民加藤

茂平代人

東京府下神田區今川小

路一丁目壹番地寄留群

馬縣士族

廣 瀬 帆 三

被告

群馬縣下上野國群馬郡

北原村平民亡富次郎後

妻飯島リエ同國同郡金
 古驛平民河野兼吉母シ
 マ同國同郡下野田村平
 民神宮幸之助代人
 東京府下京橋區南鍋町
 一丁目二番地寄留新潟
 縣平民

東京上等裁判所ノ審判

原告 外二名代盲人 大矢早利控訴ノ要領 明治十一年
 本訴復姓差拒ノ義ハ北原村平民飯嶋新右衛門ナル者五十年前死
 亡シ其後飯嶋家ハ退轉ノ姿ニ相成屋敷畑地ハ親類組合相談ノ上組

合ナル被告先代加藤富次郎ハ相預ケ追テ相續人相定ムヘクト取極
 メ置シニ加藤富次郎長男傳之助ナル者永々他行ノ末歸國シタルニ
 付則チ同人ヲ以テ飯嶋新右衛門ノ相續人トナシ追テ富次郎ト改名
 シ親類ノ交際及ヒ佛事等執行ヒ居タルニ明治五年三月十八日病没
 ナシタリ其節富次郎遺骸ヲ加藤家ノ墓所ヘ埋葬シ又リエ所有地ノ
 畝杭ニ富次郎後妻加藤リエト記載シアルヲ以テ河野シマ不審ヲ抱
 キ其旨リエヘ掛合及ヒタルニリエニ於テモ始メテ姓ノ誤リナルコ
 ニ心附キ戸長役場ヘ申出遂ニ區戸長并ニ被告茂平押印シタル左ノ
 第一號証ノ願書ヲ群馬縣廳ヘ差出セリ

第二大區七小區群馬郡北原村第三番地農加藤留次郎後家リエ今
 般飯嶋ト姓換致度段願出其原由左ニ
 曩ニ同村飯嶋新右衛門ナルモノ去ル五十年己前一家死絶退轉及

候ニ付其砌屋敷其他畑壹反五畝餘在之所へ加藤留次郎同家親族
 相談相整留次郎養子ニ相成夫ヨリ數年間姓ノ義ハ加藤トナリ又
 飯嶋ト記載シ舊幕府ノ頃ハ平民ニシテ姓ツ確乎判然ト書録ナシ
 管下方親族交際ノ砌ハ前顯ノ通面姓相用來リ然ルニ今般地租御
 改正ニ付野畑墓所等へ畝杭相建其姓加藤留次郎後家_{リニ}ト記載
 有之所ヨリ爰ニ新右衛門ト聊有縁ノ_シナル者同郡金古驛川野
 某方へ縁付候同人長男兼吉墓參ニ來リ加藤ト記載有之ニ付姓換
 之義如何ナル場ニ哉ト懸合被及候由ヲ以テ戶長方へ_{リニ}申出候
 由不分明ニ付親族呼寄其原由承及候所全ク新右衛門亡跡へ留次
 郎養子旨_ニ原_ノ申立依テハ人_ノ養子タルモノハ其家名ヲ存シ親
 類交際及佛事執行候ハ當然ノ利且私共於テモ戶籍編製ノ際飯嶋

ト可致之所原姓不判然ノ場ヨリ加藤ト記段職務不注意ノ段恐入
 候得共本人共ニ同納篤候ニ付右加藤ヲ飯嶋ト改姓被成下置度此
 六段奉願上候以上

金古驛 加藤茂 兵衛印

川野山五郎印

小鮎澤造印

戶長

明治十年第五月二日

群馬縣令梅取素彦殿

前書ノ通和違無之ニ付與印仕上申候也

右區長

志村彪三郎

然ルニ右願書中改姓トアルヲ以テ復姓ト可書改旨ニテ戸長ヘ一旦
 下付相成シテ被告茂平ニ於テ自己ヨリエノ調印ヲ取消シ其後彼此
 故障ヲ起シ原告復姓ノ願書ヘ調印相拒ミタルニ付遂ニ縣廳ニ於テ
 許可之レナク其筋ヘ願出ヘク旨申渡サレタルニ依リ明治十年十一
 月廿日初審裁判所ヘ出訴セシニ原被告審問ノ末明治十一年一月廿
 六日裁判申渡サレタリ然ルニ該裁判ニ對シ不服ノ廉有之ニ付更ニ
 控訴スルノ趣旨左ノ如シ

第一條

初審判文ニ果シテ飯嶋家ノ養子ナラハ右富次郎死去加藤家墳墓ヘ
 埋葬シタルヲシマ心附リエヘ申聞タル節更ニ飯島家墓地ヘ改葬ス
 へキヲ云々トアレハ原告シマニ於テ墓地ノ相違ナルヲ知リシハ己
 ニ埋葬後シヨニシテ且改葬等ハ一人己ノ容易ニ爲シ得キモ又
 ニ非ス又仮令加藤家ノ墓地ヘ埋葬セシトモ己ニ飯嶋家ヲ相續セシ
 同家ノ財産ヲ所有シ又同家ノ親族等ヘ交際シ同家ノ佛事等ヲ
 執行シタルヲ以テ証スルニ足レリ

第二條

同判文ニ元來富次郎ニ於テ新右衛門ノ養子ナルカ將ニ加藤家ノ分
 末ナルカ双方確手タル證據無之云々トアレハ區戸長ニ於テ原告リ
 エノ復姓ヲ至當ニ見認メシノミナラス被告茂平ニ於テモ原告第一
 號證ノ願書ヘ連署調印セシ上ハ富次郎ノ飯嶋家ヲ相續セシハ判

然著明トイフヘシ

被告 加藤茂平代人廣瀬帆三答辨ノ要領

明治十一年五月九日

第一條

原告茂平外二名ニ於テ加藤富次郎ハ飯嶋新右衛門ノ家系ヲ相續シタルモノナレバ加藤ノ姓ヲ飯嶋ニ改メ度旨ヲ申立レモ飯島新右衛門ナルモノハ文化三年中死去シ處女壹人アリトイヘモ癩症ニ罹リ頼ルヘキ親戚無之ヲ以テ組合ニ於テ之レヲ持受テ看護罷在ル處文政八年申是亦死亡シ貢租未納スルモ誰カ之レヲ辨納スルモノナカズ爰ニ於テ飯嶋家ハ斷絶シテ家督ヲ繼承スルモノナカリシ然レモ貢租ノ未進ハ捨置難キヲ以テ村吏ヨリ組合ヨリ共ニ納方申付ラシ依テ組合一同協議ノ上祖父富次郎〔加藤富次郎〕實父ナリ〔實父ナリ〕共頃組合ノ判頭ナルニ付新右衛門カ貢租ノ未進ヲ上納シテ爾來祖父富次郎之レカ

地所之所有トセリ而シテ善助〔善助ハ被告〕茂平ノ實父ナル者祖父富次郎ヨリ家

督ヲ繼承シ相續罷在ル中善助實兄傳之助嘉永四年中新右衛門屋敷跡ノ家屋ヲ建築シテ更ニ一戸ヲ立テ爾後富次郎ト改名シ加藤家ノ分家トナリ居ルシモ明治五年三月十八日死亡セリ依テ親戚朋友等相會シ加藤家ノ墓所ニ埋葬シタルニ此際妻リニハ勿論親戚一同何等ノ故障ナカリシモ今更ニ至リ加藤家ノ墓所ニ埋葬シタルハ當時知ラサル杯ト無根ノ説ヲ唱ヘ夫富次郎ノ姓〔則チ加藤〕ヲ換姓致度ハ最モ原告ノ不條理トイフヘシ

第二條

原告茂平外二名ニ於テ被告茂平ハ復姓願書ニ調印シタルヲ以テ飯嶋姓ヲ相續シタルハ明断ナル旨申立ルトイヘモ富次郎ハ前條ニ開陳スル如ク加藤家ノ分家ニシテ飯嶋家ノ家督ヲ相續シタルモノニ

無之原告ハ區兵長ト馴合區長ノ威權ヲ以テ一時強迫セラレ度
 調印シタルナレトモ到底其願書ハ群馬縣廳ヨリ却下セラレ依之原被
 告ハ承諾ノ上曩ニ押捺シタル印影ヲ塗抹シタルモナレハ無効ナ
 ルヲ論テ俟サレ所ナリ殊ニ原告「リ」ニ「富次郎ノ後妻」ニシテ其夫ノ
 家名ヲ相續シ加フルニ財産ヲ受繼キ夫富次郎死後ニ至リ突然加藤
 姓ハ飯嶋ニ換シトスルハ最モ不倫理ノ事トイフヘシ又原告「リ」等
 ノ如キハ他人ニシテ本訴ニ關係スヘキモノニ非サルナリ

第三條
 前條々ニ陳述スル理由ト第一號證ヨリ第三號^墓ニ至ル迄ノ證トニ
 依リ被告茂平ニ於テハ原告等ノ請求ニ應スヘキ條理無之義ト思考
 ス

第一號證 明治五年戶籍

群馬縣第二大區七小
 區上野國群馬郡北原
 村第三番地住平民加
 藤富次郎亡後妻

同
 文化五年五月十六日生
 年六十五歲

同
 明治元年六月三日生
 年五歲

當村平民加藤茂平長女
 氏神豐受社
 神葬祭

右ノ通相違無御座候也

明治十一年五月

戶長

第二號證

以書付奉申上候

木村市五郎印

第二大區七小區群馬郡北原村戸長小鮎澤藏外村吏一同奉申上候
 當村第三番地亡加藤富次郎後家「リ」エ姓換出願ノ義ニ付原山取調
 可差出旨被仰付舊村吏共々立會取調へ候處左ニ
 此段飯嶋新右衛門ト申者該地ニ居住和續罷在候處文化二年乙亥
 ノ二月病死女子壹人有之候へ共至親無之殊ニ癩病ニテ介抱可致
 モノ無御坐無據組合ニテ世話致シ候内文政八年丙酉ノ四月二日
 死去致候末和續可致者無之因テ該家名ハ一旦斷絶相成候ニ付宅
 地并耕地ノ御年貢諸掛リ等御上納可致様無之自然三ヶ年未納ニ
 付村吏ヨリ組合へ納方申付處今般ノ願人「リ」エ夫富次郎實父加藤

富次郎義該組合ノ判頭ニ付組合一同ヨリ同人へ和續辨納爲致因
 テ去ル五十三年己前文政八酉年中ヨリ右宅地并耕地トモ更ニ
 加藤富次郎所有ト定公租上納相勤メ支配致來候内同人病死後實
 子加藤善助和續中迄引續キ所持罷在候處同人實兒幼名辨之助義
 東京出稼ノモ「ニ」御座候得共復歸ノ上實父ノ名義ヲ繼則加藤富
 次郎ト唱去ル嘉永四亥年中宅地へ家屋新築更ニ一戸取立加藤姓
 ナ以テ廿七ヶ年以前ヨリ富次郎和續罷在候義ニ無相違御座候前
 書ノ通リ一同立會取調候段聊和違無之依之連印ヲ以奉申上候也

右村舊村吏

明治十年第九月八日

惣代人

木村彌門

全

町田金兵衛
立會人

木村利根吉

副戸長

加藤作五郎

全

松田信太郎

全

松田宗七

戸長

小 鮎 澤 藏

第三號證墓碑ハ零之

判文

被告加藤茂平ニ於テ原告加藤リエ亡夫加藤富次郎ハ被告加藤家ニ
ヨリ分家シタルモノニテ飯嶋新右衛門ノ養子ニ非ラサレハ原告リエ
カ加藤姓ヲ飯島姓ニ換シトスルハ不當ナルニ付原告請求ハ相拒ム
旨申立レモ被告第二號證ハ原告リエノ亡夫富次郎ノ履歴ヲ記載シ
テ其履歴ノ由ルニキ証ナクシテ被告第二號證ハ明治十年九月
八日ニ於テ戸長小鮎澤藏外六人ノ保證迄ニ止リ飯島新右衛門ノ所
有地ニ付公租未納其外被告茂平カ和償ヒタル證ナリ又飯嶋新右衛
門ノ所有地ヲ被告カ所有シタルノ確證モアラズ又被告第六號明治
七年名寄帳原告リエ所有地ハ被告カ分與シタルノ證無之依リニ被
告第六號證ノ地ヲシテ被告カ分與シタルモノナリトスルモ財産ノ
讓與ハ人民和互ニ爲シ得ルモノニ付特リ財産ノ讓與ノミヲ以テ分

家シタルモノナリトスル能ハス况ヤ被告第六號名寄帳ノ内畑六畝拾九歩ハ原告第三號證ノ通り原告リエ亡夫富次郎カ買得シタルモノナルヲヤ然ルヲ被告ニ於テ右富次郎ハ俳優ニシテ地所買得スヘキ資力ハアラサリシ旨ヲ以原告第三號證ハ真正ノモノトハ見認カタシト申立ントモ右ハ全ク被告ノ想像ニ止リ原告第三號證ヲシテ真正ノモノニ非ラストスル證ノ見ルヘキナク加之原告リキニ亡夫富次郎ハ被告ヨリ分家シタルモノナリト見認ムヘキヲ證アラズ然リ而シテ原告第一號證ニ飯島新右衛門ナルモノ云々屋敷其他畑壹反五畝余在之所ハ加藤留次郎同家親族相談相整留次郎養子ト相成云々本人共一同納篤候ニ付右加藤ヲ飯嶋ト改姓被下置度云々トアリ被告茂平之ニ連印セリ右壹號證ニ被告カ連印シタルハ當時區兵長ノ説諭ニ因リタル旨被告申立ノモ倭令區兵長ノ説諭有之モ其調

印スヘカラサル書面ハ無故調印スヘキノ理ナク且右壹號證被告ヲ印章ヲ塗抹シタル順序分明ナラス果シテ原告第一號證ニ被告ハ調印シタルハ被告ノ錯誤ニ出タルモノトシテ原告カ亡夫富次郎ナル者ハ到底飯嶋新右衛門ノ遺物財産ヲ相續シタルモノナリ因テ被告ニ於テ飯嶋新右衛門ノ遺物財産ヲ相續シタル原告カ亡夫富次郎ハ被告ヨリ分家シタルノ證無之上ハ原告ノ復姓願法被告カ相拒ムノ權無之モノト可相心得候事 明治十一年七月廿四日 大審院ニ於テ 原告 加藤茂平代人廣瀬帆三上告ノ要領 第一條 東京上等裁判所ノ判文ニ被告加藤茂平第三號證ハ明治十年九月八日ニ於テ戸長小鮎澤造外六名ノ保證迄ニ止リ飯嶋新右衛門ノ所有

ル能ハストアリ是レ法術ニ於テモ財產讓與ト分家トハ異同アルチ
己テニ看認メラレタルモノナリ左スレハ故加藤富次郎カ所有セシ
土地ハ其原故飯嶋新右衛門カ所有地ナリシトテ富次郎チ以飯島家
ノ相續人タル證據ト爲スチ得サルヘシ

第三條

判文ニ第一號證^{改姓}願書^{被告加藤茂平}ノ印章ヲ塗抹シタル順序分明ナ
ラストアレトモ元來リエカ改姓願ヒハ原由ナキチ以テ縣廳ヨリ差
戻サレタルモノナリ依テリエ等承諾ノ上茂平ノ印章ヲ塗抹シ其旨
村吏ヘ届出置キシ順序ナル事ハ曾テ申立タリ何ソ順序分明ナラス
ト云フ可シヤ

又判文ニ原告^等第一號證^{被告カ}調印シタルハ被告茂平ノ錯誤
ニ出タルモノト爲スモ到底飯嶋新右衛門ノ遺物財產ヲ相續シタル

モノナリトアルニ依レハ法術ニ於テモ茂平カ調印ハ錯誤ニ此テダ
ルチ看認ラレタリ錯誤ノ調印ハ其効チ有セス况ヤ已テニ塗抹セシ
ニ於テハ全ク反古屬スルモノナリ

又判文ニ到底飯嶋新右衛門ノ遺物財產ヲ相續シタリトハ何ソヤ加
藤リエ等ハ右反古證書ノ外富次郎チ以飯嶋家ノ相續人ト爲スノ證
據ハ一モ所持セサルニ非ラスヤ若シ富次郎チシテ飯嶋家ノ相續タ
ラシメシモノナラハ戸籍面ニ飯嶋富次郎後妻リエトナカルヘカラ
サルニ加藤富次郎後妻リエトアリ是レ偶然ノ證據ニアラサルナリ

第四條

控訴原告ノ内リエハ群馬縣上野國群馬郡金古驛城内文次郎ノ長女
ニシテ文久三年加藤富次郎ノ後妻トナリ富次郎死後該家ヲ相續セ
シモノナリ凡妻トシテ夫ノ家名ヲ顛覆セント欲スルハ節義ニ戻レ

ル所業ト云ヘシ

又控訴原告ノ内河野シマハ飯嶋家ノ血屬ニ非サルヲ以本訴ニ立入ルヘキ權利ナキモノナル旨第九號(戸長取)証ヲ以數回辨論ニ及シカ東京上等裁判所ニ於テ之レカ判決ヲ與ヘテレサリシハ遺漏アル裁判ニシテ終審ノ終審タル所以ヲ失スルモノト思考ス
前條々ノ理由ナルヲ以東京上等裁判所ノ裁判ヲ破毀シ更ニ至當ノ裁判アラン事ヲ請フ

被告 飯嶋リニ(外)二名代人大矢早利答辨ノ要領

第一條

原告(加藤茂平)第二號證(戸長取)ハ戸長小鮎澤造外六名カ假令縣廳へ差出シタル書面ナルニモセヨ其證ノ據ルヘキモノナリ徒ニ小鮎澤造等自己ノ思想ニ止マルモノナレハ其証ノ無効ナルヲ素ヨリ論テ

埃タス況ヤ小鮎澤造等ニ於テハ既ニ被告(リニ外)第一號證(復姓)ニ記名調印セシニ於テナヤ

第二條

原告ニ於テハ第一號(明治七年七)第二號(戸長取)第五號(明治五年)第六號(明治七年)ヲ以テ被告ハ原告ノ分家タルヲ證據立レ元來本訴ノ原因ハ被告カ誤テ加藤姓ヲ冒シタリシヲ以テ飯嶋ト復姓セント欲スルモノナレハ右第一號第五號第六號證ニ其誤謬ノ姓即加藤ト記載シアルヲ以テ證トスヘカラサルモノナリ然シテ其加藤姓ノ誤謬ナル證ハ被告リニ(夫)富次郎ハ飯島新右衛門ノ跡ノ家名財產ヲ相續シ飯嶋家ノ親族ト交通セシヲ以テ判然著明トイフヘシ

第三條

原告ニ於テ被告第一號證(復姓)ニ押捺アル原告ノ印章ヲ塗抹シタル

ハ原告第二號證(戸長取)ヲ村吏カ縣廳へ進呈シタルヲ以テ云々申述
 スレトモ被告第一證即復姓願書ヲ原告カ自儘ニ其印影ヲ塗抹セシ次
 第ハ最前被告カ該願書ヲ縣廳へ進呈セシニ其文中「改姓」云々ノ文詞
 アルヲ以テ復姓ノ文字ニ改メ再進スヘキ旨ニテ戸長迄下戻シ相
 成タル際原告ハ自儘ニ其印影ヲ塗抹セシモノニテ原告ノ申立ハ頗
 ル事實ニ相違セシモノナリ今假リニ一步ヲ譲リ原告カ云フ如キ順
 序ナリトスルモ被告リニ「亡夫ハ飯島家ノ遺物財產ヲ相續セシ上ハ
 飯島家ノ相續人タルヲ明カナリ然ルニ原告ハ被告リニ「亡夫ハ原告
 ノ分家ナリト云ヒ其證左ナク又飯嶋家ノ遺物ヲ原告カ所有トナシ
 タルヲ見ルヘキ證ナケレハ原告ノ申述ハ到底無證ノ口實トイフ
 ヘシ況ヤ原告ノ印章ヲ塗抹セシハ原告申述ノ順序ニアラスシテ原
 告カ自儘ニ塗抹シタルモノナルニ於テナヤ

第四條

被告リニ「亡夫富次郎ハ飯嶋新右衛門ノ家名財產ヲ相續セシモノナ
 ルニ誤テ加藤姓ヲ冒シ來リタルニ付今其誤謬ヲ發見シ原告ト共ニ
 第一號(復姓)願書ノ如ク復姓ヲ願ヒ出シセシモノナリ然ルチ原告ニ於テ凡
 妻トシテ夫ノ家名ヲ顛覆セシトスルハ節義ニ戾ルノ所業ナリト申
 述スレトモ被告リニ「於テ前願ノ如ク夫ノ誤冒シタルノ加藤姓ヲ改
 めルニ於テ何ノ之ヲ節義ニ戾ルノ所業トイフヘケンヤ」云々
 又河野シマ祖母并ニ神宮幸之助ノ祖母ハ共ニ飯嶋新右衛門ノ姉妹
 シマ祖母ハ新右衛門ノ姉ナリ幸ニシテ無縁ノ者ニ非ス故ニ被告リ
 ニ「ト共ニ復姓ノ由ヲ出訴セシ所以ナリ」云々
 且ツシマハ新右衛門ノ親族ナルヲ原告モ認メタルヲハ被告第一
 號願書ニ「曩ニ新右衛門有縁ノシマナル者同郡金古驛河野某方へ縁

付候云々ト有之ヲ以テ明ホル...

第五條... 前條ニ陳述セシ如ク原告第一號第三號第五號第六號証ハ一モ有効
 証... 非... 被告... 亡夫富次郎ハ原告ノ分家
 非... 被告... 亡夫カ飯島家ノ遺物ヲ相續
 セシ次第夫陳述セシ被告所有地ノ内屋敷舊反別貳畝廿五步畑三
 畝尤步下々畑九畝廿五步ノ地ハ原告モ認ムル如ク飯嶋新右衛門ノ
 遺物ニシテ夫原告ガ該遺物ヲ所有トナシタルノ憑證ナリ又被告リ
 亡夫ハ原告ノ分家ナリトノ憑證モナケレハ即其遺物ヲ相續シタル
 ハ飯嶋家ノ相續人タルコト明カナリ又原告ハ第六號証(名寄)ノ地所悉
 皆原告ガ被告ガ亡夫ニ分與シタルナリト云ラモ被告リモ所有地
 即前頭掲ケタル屋敷地并ニ畑二个所ハ飯嶋新右衛門ノ遺物ナリ又

畑舊反別六畝拾九步下々畑内壹反貳畝貳拾四步ノ地ハ被告第三號
 (清太郎)第四號(源吾)ノ如ク被告ニリ亡夫カ買得シタルモノニ
 シテ原告カ所有地ヲ分與サレタルモノニ非サルナリ夫レ如此被告
 亡夫富次郎ハ飯嶋家ノ相續人タルコト分明ナレハ東京止等裁判
 所ノ裁判ハ頗ル其當ヲ得タルモノニシテ原告茂平ニ於テ被告ノ復
 姓ヲ拒ムヘキ條理無之義ト思考ス...

上告ノ主點ハ左ノ條件ナリトス...

第一 明治十年九月八日付ヲ以北原村戸長小鮎澤造其他舊村吏ヨ
 リ群馬縣令ヘ差出セシ書面ヲ採用ナカリシハ不當ノ裁判ナリトノ
 事(上告要旨第一條)

第二 財産相續ト家名相續トハ區別アリトノ事(上告要旨第三條)

第三 明治十年五月二日付ヲ以加藤リニ加藤茂平外二人ヨリ群馬

縣令宛ノ改姓願書ハ消滅セシモノナリトノ事(上告要旨第三條)
第四 控訴原告人ノ内河野シマハ本訴ニ參スヘキ身分ニ非ストノ事(上告要旨第四條)

辨明

第一條

東京上等裁判所ニ於テハ被告(加藤茂平)第二號證ハ加藤富次郎ノ履歷ヲ記載シタル迄ニ止マリ飯嶋新右衛門ノ所有地ニ付公租未納其外被告カ和償ヒタルノ證ナク又飯島新右衛門ノ所有地ヲ被告カ所有シタル確証アラスト云テ以擯斥シタリ然レ共右ノ書面(第二號)ハ北原村戸長及ヒ舊村吏等カ縣廳ノ命令ニヨリ飯嶋加藤兩家ノ轉末ヲ取調ヘタル書面ニシテ特ニ富次郎ノ履歷ヲ保證セシモノニ非ス且新右衛門死後其所有地ノ貢納ヲ加藤家ニテ納メ來リシ事ハ當ニ

戸長等ノ取調書(第貳號)ニ由ルノミナラス(リ)エ等カ控訴狀ニ(飯島新右衛門ナル者五十年前死亡飯嶋家ハ退轉ノ姿ニ相成候ニ付屋敷畑地等ハ親類組合等相談ノ上組合ナル被告(加藤茂平)先代加藤富次郎(次郎ハ實父)ヘ相預ケトアルニ依レハ其貢納モ加藤家ニテ支弁モ來リシ事ハ推知スヘクシテ自ツカラ戸長ノ取調書ニ符合セリ然ルチ右取調書(第二號)ハ富次郎ノ履歷ヲ保證セシニ止ルト云テ以擯斥シタル事實ニ適セサル裁判ナリトス
第二條
控訴被告人加藤(リ)エ等ニ於テ亡夫富次郎ハ飯嶋家ノ土地ヲ有セシニヨリ即飯嶋家ノ相續人ナリト主張セシテ東京上等裁判所ニ於テ(リ)エ等カ申立テ是ナリト判決シタリ然ルニ(リ)エ夫富次郎カ飯嶋家ノ土地ヲ有セシ手續ニ於ケル飯嶋新右衛門ハ文化二年ニ死去シ女